2018年度

活動報告書

Tokai University Student Project Center Activity Report

東海大学チャレンジセンター

2018年度チャレンジセンター
活動報告書の発行にあたって

チャレンジセンター長
岡田 工

日頃より東海大学チャレンジセンターの活動にご理解、ご協力ありがとうございます。2006年に東海大学の建学の精神のもと、学生の社会的実践力を育成するチャレンジセンターを発足し、2019年3月で13年間にわたる教育活動を継続することが出来ました。これまでに、ご支援をいただきました皆様には一方ならぬご厚情を賜り、お礼申し上げます。

チャレンジセンターのプロジェクト活動では、学部・学科・学年の枠をこえ、「地域活性」「社会貢献」「国際交流」「ものつくり」「環境・動植物保護」など多様な分野で活動しています。また、直面する様々な課題を乗り越える体験を通じて社会的実践力を培います。2018年度のプロジェクトは、20件のチャレンジプロジェクトと20件のユニークプロジェクトが活動しており、全国5キャンパスで1805名の学生がプロジェクトに参加しています。

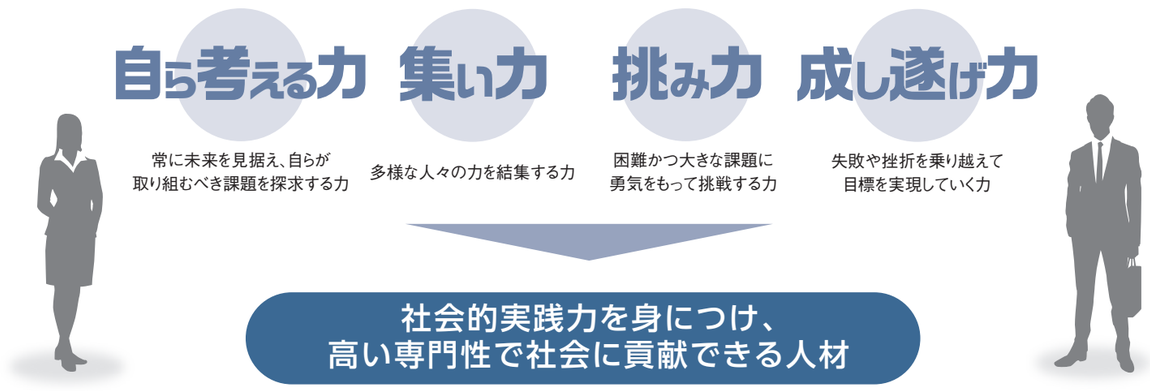
チャレンジプロジェクトは、参加人数が30名以上（湘南キャンパス以外は20名以上）で、学生が自由な発想で企画・立案した年間を通じたプロジェクト活動です。また、大学職員によるプロジェクトコーディネーターと教員によるプロジェクトアドバイザーがサポートしています。また、ユニークプロジェクトは、少人数のグループ（10名以上）でプロジェクトを企画でき、将来的にチャレンジプロジェクトとして発展することを目的とした萌芽的位置づけのプロジェクトです。学生の希望でプロジェクトコーディネーターやアドバイザーも付けることが可能です。

2018年度より「パブリック・アチーブメント(PA)型教育」として発展教養科目（「シチズンシップ」「ボランティア」「地域理解」「国際理解」）を開講しました。市民としての教養につながる導入的な授業を1年生の必修科目として開講し、実践的な活動としてチャレンジセンターのプロジェクトが位置づけられています。

今後も本センターは、プロジェクト活動を通じて学生の社会的実践力を伸ばすサポートを進めていきます。引き続きチャレンジセンターの活動にご意見、ご協力をいただきますようよろしくお願いします。

2019年9月

チャレンジセンターは
社会が求める4つの力を育む成長の場です。



INDEX

2018年度チャレンジセンター …… 1
活動報告書の発行にあたって
チャレンジセンターの取り組み …… 3
研修会 …… 4
チャレンジプロジェクト活動報告 …… 5
【湘南キャンパス】 病院ボランティアプロジェクト …… 5
スポーツ社会貢献プロジェクト …… 7
サイエンスコミュニケーター …… 9
キャンパスストリートプロジェクト …… 11
Tokai Formula Club …… 13
ライトパワープロジェクト …… 15
東海大学学生ロケットプロジェクト …… 17
Tokai International Communication Club …… 19
3.11生活復興支援プロジェクト …… 21
DAN DAN DANCE & SPORTS プロジェクト …… 23
Beijo Me Liga …… 25
熊本復興支援プロジェクト …… 27
Tokai Dream Space Team …… 29
【高輪キャンパス】 Takanawa共育プロジェクト …… 31
【熊本キャンパス】 先端技術コミュニティACOT …… 33
メカトロマイスタープロジェクト …… 35
阿蘇援農コミュニティープロジェクト …… 37
阿蘇は箱舟プロジェクト …… 39
あにまるれすきゅープロジェクト …… 41
【札幌キャンパス】 札幌ボランティアプロジェクト …… 43
ユニークプロジェクト活動報告 …… 45
ものつくり館訪問一覧 …… 45
チャレンジセンターの活動 …… 46
チャレンジセンター長賞 …… 46

チャレンジセンターの取り組み

チャレンジセンターでは、社会で活かせる力を身につけるために、学生自身が自由な発想で企画したプロジェクト活動を支援します。また、プロジェクト活動の質を高めるための人的な支援として、各プロジェクトに原則として本学の教職員から選抜されたコーディネーターおよびアドバイザーを配置するなど、安心して活動に取り組むことができるサポート体制を整えています。

チャレンジセンター運営委員会

チャレンジセンター運営に関連した部長などで構成され、実行委員会での協議を踏まえ、
本センターの運営全体について最終的な審議をします。

チャレンジセンター実行委員会

チャレンジセンターの活動に関連した課長などで構成され、プロジェクトが活動するにあたり
必要な環境整備等、実務的な内容を審議します。

プロジェクト協議会

プロジェクト活動を円滑に推進するため、プロジェクト間の情報交換、本センターからの連絡事項の伝達を行う場として、プロジェクト代表者の出席を義務付け、原則として月1回開催。今年度は全8回開催し、全キャンパスをTV会議システムで接続して実施。

チャレンジセンター組織

現代教養センター	チャレンジセンター
所長 成川忠之教授	センター長 岡田工教授

プロジェクトコーディネーター

プロジェクト全体の進行状況を把握し、活動全般の相談役や提出書類の作成指導を担います。また、予算管理・工程管理に関する指導や、活動が困難な状況の時に円滑に進むよう学生にモチベーションを与える「縁の下の力持ち」としての役割を担っております。なお、コーディネーターは本センターが実施する複数の研修会の受講が義務づけられており、これは東海大学人事制度において「業務別研修」と位置づけられたオリジナルのSD（Staff Development）活動です。

プロジェクトアドバイザー

専門的知識または技能を持った教員が担当し、各プロジェクトに1名以上配置されます。主な役割として、プロジェクト活動に対して専門的な立場から指導・助言を行います。プロジェクトの活動をより質が高く大きなチャレンジとするためには、プロジェクトアドバイザーの豊富な知識と経験に裏付けられたアドバイスが必要になります。

支援　支援　支援

プロジェクト活動

学部・学科・学年の枠を越えた学生たちがチームならではの目標を掲げ、自主的および創造的に地域活性、国際交流、ものつくりなどの企画を行うことで社会的実践力を体得していきます。

チャレンジプロジェクト

◆学生が自由な発想で企画・立案した年間を通じたプロジェクト活動
◆プロジェクトコーディネーター、プロジェクトジェクトアドバイザーを配置
◆メンバーが複数学科に横断して構成されていること
◆参加人数が30名以上であること（湘南キャンパス以外は20名以上）

【プロジェクト修了認定】
チャレンジプロジェクトがチームとしての条件を満たし、かつプロジェクトコーディネーターによって1年間の活躍が評価されたプロジェクトメンバーには修了認定が授与されます。

ユニークプロジェクト

◆将来的にチャレンジプロジェクトとして発展することを目的とした萌芽的位置づけのプロジェクト
◆少人数のグループ（10名以上）で構成
◆学生からの希望があり、かつ人員が配置できる場合はコーディネーターとアドバイザーを配置

研修会

リーダー研修会

キャンパスを越えたプロジェクト学生同士の交流および“プロジェクトリーダー”の育成を通じて、プロジェクト活動を活性化することを目的に実施。
2019年2月20日～22日、「2018年度チャレンジセンターリーダー研修会」を実施
ねらい：プロジェクトリーダーとしてメンバーを統率し、プロジェクト目標を達成するために必要な力を育む
　○リーダーとしての課題を捉え、リーダーシップとは何かを考える
　○リーダーに必要なスキルとして、ファシリテーションを学ぶ
　○リーダーとしての目標を考え、表明する
期　　間：2019年2月20日（水）～2月22日（金）
実施場所：湘南校舎19号館2階オープンマルチアトリエ
宿泊場所：湘南校舎クラブハウス
参 加 者：学生48名（チャレンジプロジェクト（20）各2～3名）
講　　師：岡田工（チャレンジセンター長）
　　二ノ宮リムさち（現代教養センター准教授）
　　田島祥（現代教養センター准教授）
　　池谷美衣子（現代教養センター講師）
　　黒崎岳大（現代教養センター講師）

コーディネーター・アドバイザー研修会

プロジェクト支援に活用できるスキル向上を目的とした研修や意見交換会を TV会議システムを活用し実施。特にプロジェクトコーディネーターに対する研修は、多様な学生の成長に応じられるよう、職員が「教育の担い手」である認識を深める本センター独自のSD。

開催	研修名	テーマ・内容	講師	参加人数
4月17日	プロジェクトコーディネーター事務研修	センター長、職員によるチャレンジセンター教育プログラム及びコーディネーター業務に関する説明	岡田工（チャレンジセンター長） 曽我研郎（チャレンジセンター課長）	28
5月18日・19日	プロジェクトコーディネーター能力研修	2018年度カリキュラム改訂について コーディネーター湘南宣言を知る 私の「コーディネーター宣言」を作ろう	岡田工（チャレンジセンター長） 二ノ宮リムさち（現代教養センター准教授） 村松香織（現代教養センター准教授）	18
6月28日	プロジェクトアドバイザーミーティング	チャレンジセンターの教育プログラムとは コーディネーター能力研修の報告 アドバイザーとしての支援と課題～コーディネーターとの協働を考える～	岡田工（チャレンジセンター長） 池谷美衣子（現代教養センター講師） 二ノ宮リムさち（現代教養センター准教授）	18
10月26日	プロジェクトコーディネーター中間研修	「指導」と「支援」を考える ～学生の主体性を引き出すには～	池谷美衣子（現代教養センター講師）	21
2019年2月19日	プロジェクトコーディネーター・アドバイザー意見交換会	プロジェクトを育てる経験に学ぶ ー「人的支援」の役割・再考ー	杉本洋文（工学部建築学科教授）	44

スポーツボランティア研修

2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックのボランティアスタッフが2018年9月に募集開始となることを受け、本学の学生や教職員がスポーツボランティアとして大会へ参加することを支援するため実施。

主　　催：特定非営利活動法人　湘南スポーツコミュニティセンター
事 務 局：チャレンジセンター

STEP1 『スポーツボランティア研修会』

スポーツボランティアの基礎を学びたい方やこれからスポーツボランティアを始める方の研修

研修会を修了し、スポーツボランティアとしての活動経験があれば、「スポーツボランティア・リーダー養成研修会」への受講資格が得られます。
5月23日(湘南校舎開催)、6月5日(湘南校舎開催)、9月26日(高輪校舎開催)の3回実施、計462名が参加。

STEP2 『スポーツボランティア・リーダー養成研修会』

一般ボランティアと共に、楽しく充実した活動をするためのリーダーシップを学ぶプログラム

2018年7月15日(湘南校舎開催)、95名が参加

チャレンジプロジェクト活動報告

病院ボランティアプロジェクト

湘　南

達成目標　今までの活動を振り返り、
メンバーが主体的となれる新しい企画を実現する

学びのテーマ　聞く力を身につける

リーダー	大野遥	教養学部芸術学科音楽学課程	2年
サブリーダー	大槻勇一	政治経済学部経営学科	3年
サブリーダー	佐藤哲郎	工学部医用生体工学科	2年
広報リーダー	吉田早紀	教養学部芸術学科音楽学課程	2年
会計	矢吹真菜	工学部医用生体工学科	2年
コーディネーター	佐藤多嘉雄	医学部付属病院健診センター	
アドバイザー	池村明生	教養学部芸術学科デザイン学課程	
	児玉千代子	医学部看護学科	

（参加人数　30名）

❶ 活動概要

病院で入院生活を送る患者さんの中には、「入院生活」という非日常の空間に戸惑い、不安を感じている人もいる。私たち病院ボランティアプロジェクトは、患者さんが抱える不安を少しでも緩和するために活動している。本プロジェクトの主な活動は、本学医学部付属病院で、夕飯の配膳などのお手伝いをさせていただく病棟活動である。また、年に2回の院内コンサートの企画・運営を行っている。他にも、医療セミナーや絵本読み聞かせ会など、地域の方々を対象にした企画も行っている。

❷ 一年間の達成目標と学びのテーマに対してどのような活動を行い、どのような学びがあったか

「今までの活動を振り返り、メンバーが主体的となれる新しい企画を実現する」という達成目標は、昨年度の反省点から立てた目標である。学びのテーマである「聞く力を身につける」は、患者さんのお話を聞くことに力を入れたい、という思いから立てたテーマである。特に病棟活動は、本来の主旨である「患者さんに寄り添い、お話を聞くことにより、患者さんの気持ちを推し量れるようになる」ということを遂行することができていないことから、「聞く力」を身につけ、原点に戻る必要があった。

「メンバーが主体的となれる企画」を目指すため、既存の企画でのメンバーの様子を振り返り、それぞれ改善を図った。病棟活動では、「患者さんに寄り添い、お話を聞くことにより、患者さんの気持ちを推し量れるようになる」という活動目的のために、メンバーから患者さんへ積極的に関わることで、メンバーの主体性を高めた。本学医学部付属大磯病院で行った癒しのイベントでは、患者さんの様子や想いを汲み取るために、公演開始前と公演終了後に患者さんとそのご家族に話しかけを行った。本学医学部付属病院で行った院内コンサートでは、メンバーが出演者になり、患者さんの表情や盛り上がり具合を、いつもとは違う視点から見ることを目指した。地域の保育園、幼稚園に伺い行う絵本読み聞かせ会では、昨年度まで年に2、3回であった開催回数を月一回に増やし、開催場所も1箇所から4箇所に増やした。そのことにより、メンバーが積極的に参加し、主体的な活動を目指した。地域の方々を対象にした医療セミナーでは、より多くの方々に参加していただくため、地域連携課へ協力を依頼した。また、ポスターやチラシのデザインにも力を入れ、近隣の商店街のお店や飲食店へメンバーが直接掲載の交渉を行った。メンバーが主体的になるためには、メンバー1人1人が「病院ボランティアプロジェクトのメンバーである」という自覚と責任を持つ必要がある。今年度の活動を通じて、メンバーそれぞれのメンバー意識の違いをよく理解することができた。本プロジェクトは、企画で班に分かれて活動することが多いため自分が担当しない企画に対しての参加意識が低いメンバーが多いことが課題としてあげられる。来年度は、全ての企画に対してメンバー全員が役割を持ち、幹部や班のメンバーのみではなく、メンバー全員が責任感を持つように全体ミーティングの場で情報共有を徹底していきたい。

「聞く力」は、病棟活動や癒しのイベントで重要視した。病棟活動は、上記のように本来の主旨を遂行するため、患者さんのお話を「聞く力」、さらには看護助手さんの指示をしっかりと「聞く力」を重視した。癒しのイベントでは、字を書くことが難しい患者さんに直接感想を「聞く力」を重視した。春セメスターの病棟活動では、1年生にとって初めての経験であったため、患者さんのお話を聞く余裕がない様子であった。しかし、秋セメスターでは1年生にも余裕が生まれ、患者さんのお話を聞くことができているメンバーが多くなった。一方、癒しのイベントでは、1年生は患者さんに話かけることができず、お話を聞くことができたのは上級生のみだった。1年生がまだ慣れていない状態で患者さんに話しかけることは難しいため、介護施設などでお話をする練習をするなど、話しかけ方、話の聞き方の練習が必要だということを学んだ。

❸ 年間スケジュール

月	企　画	概　要
5・6・7	絵本読み聞かせ会	近隣の保育園・幼稚園に訪問し、子どもたちに医療や病気、健康についての知識を絵本を通じて伝える企画。秦野市立大根幼稚園を含めた4つの保育園・幼稚園で月1回活動を行った。
	病棟活動	「患者さんに寄り添い、お話を聞くことにより、患者さんの気持ちを推し量れるようになる」という目的のもと、本学医学部附属病院にてボランティア活動を行った。春セメスターは5月から7月まで開催。
8	絵本読み聞かせ会	近隣の保育園・幼稚園に訪問し、子どもたちに医療や病気、健康についての知識を絵本を通じて伝える企画。
9	癒しのイベント	本学医学部附属大磯病院にて、入院されている患者さんとそのご家族を対象に、夏を感じていただけるコンサートを開催する企画。外部の音楽団体さんをお招きし、演奏していただいた。メンバーは当日の運営を行った。
	絵本読み聞かせ会	近隣の保育園・幼稚園に訪問し、子どもたちに医療や病気、健康についての知識を絵本を通じて伝える企画。
10	病棟活動	「患者さんに寄り添い、お話を聞くことにより、患者さんの気持ちを推し量れるようになる」という目的のもと、本学医学部附属病院にてボランティア活動を行った。秋セメスターは10月から12月まで開催。
	中間報告会	今までの活動を発表する。
11	病棟活動	「患者さんに寄り添い、お話を聞くことにより、患者さんの気持ちを推し量れるようになる」という目的のもと、本学医学部附属病院にてボランティア活動を行った。秋セメスターは10月から12月まで開催。
	建学祭・ホームカミングデーでの紙芝居読み聞かせ	ホームカミングデー（当プロジェクトが作成した絵本を元に紙芝居を行う）・写真展（過去の企画について写真などを用いて活動報告を行う）
12	病棟活動	「患者さんに寄り添い、お話を聞くことにより、患者さんの気持ちを推し量れるようになる」という目的のもと、本学医学部附属病院にてボランティア活動を行った。秋セメスターは10月から12月まで開催。
	院内コンサート	本学医学部附属病院にて、入院されている患者さんとそのご家族を対象に、夏を感じていただけるコンサートを開催する企画。メンバーと来場者の方々で一緒にクリスマスソングを歌った。

❹ 協力団体

東海大学医学部付属病院、本学医学部付属大磯病院、秦野市立大根幼稚園、認定こども園東海大学付属本田記念幼稚園、社会福祉法人浜岳福祉会金目保育園、社会福祉法人みずほ会なでしこ第2保育園、湘南シーウィンドアンサンブル、仲よしコーラス“うりぼう”、東海大学教養学部芸術学科デザイン学課程2年生安藤梨佐・中村詩菜

❺ メディア掲載・放映

なし

スポーツ社会貢献プロジェクト

湘　南

達成目標　スポーツの持ち力を感じ、考え、実践し地域社会に広げる

学びのテーマ　スポーツの可能性を学ぶ

リーダー	相澤さやか	体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科	3年
サブリーダー	和田智宏	体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科	3年
サブリーダー	田代裕司	体育学部生涯スポーツ学科	3年
広報リーダー	小澤澪	法学部法律学科	3年
会計	井嶋倫子	法学部法律学科	3年
コーディネーター	矢後慶子	キャリア就職センター	
アドバイザー	萩裕美子	体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科	

（参加人数　83名）

❶ 活動概要

当プロジェクトは、東海大学周辺の地域である平塚市・秦野市・伊勢原市在住の幼児から高齢者までの幅広い年齢層を対象にスポーツイベントの企画・運営を行っている。スポーツ活動を通じて、より多くの人がスポーツに親しむことのできる機会を創り出していくことを目的とし、活動をしている。イベントを通じて、スポーツによる人と人との繋がりを感じてもらい、健康に対する意識やコミュニケーション能力の向上を目指す。スポーツの可能性を広げることで社会貢献をしたいと考えている。

❷ 一年間の達成目標と学びのテーマに対してどのような活動を行い、どのような学びがあったか

今年度、当プロジェクトは「スポーツの持つ力を感じ、考え、実践し地域社会に広げる」を達成目標とし、「スポーツの可能性を学ぶ」を学びのテーマとして設定し活動してきた。東海大学周辺に在住の幼児から高齢者まで幅広い年齢層に向けてスポーツイベントの提供をしていく中で、各イベントの対象となる参加者が求めるニーズを考え、企画、運営を行ってきた。また今年度は例年にない新しいイベントを取り入れることでプロジェクトとして成長することができた。スポーツの持つ力とは、人と人との繋がり、健康の保持増進や喜びなど多様であると考える。そのような力を感じてもらえるようなプログラムを参加対象に合わせて企画した。例えば、未就学児と保護者を対象とした「ニコニコ教室」では、安全面に配慮し、シンプルなルールで楽しめる遊びを提供することで、親子間、親同士の交流や地域コミュニティの広がりを感じられるイベントとなった。また、高齢者を対象に行われる「ノルディックウォーキング教室」では、学生との交流を楽しみながら歩くイベントであることから、地域の方々と大学生が一緒に体を動かすことによって繋がることができ、さらに参加者が健康に対して意識するきっかけを提供することができた。「第11回東海スポーツDAY」では、「普段接することの少ない他の小学校の児童、他学年や大学生との交流の場とする。また、スポーツＤＡＹに関わった人にスポーツの持つ力を感じ、考える機会を提供する」ことを目的とし、テーマを「スポーツの持つ力って何だろう？」とした。イベントの最後にアンケートにて、テーマにもある「スポーツの持つ力とは何だと思いますか？」と参加者の子どもたちに質問をしたところ、「友達を作ることができる」「皆を元気にする」などといった回答が得られた。このことから、イベントの目的として設定した「普段接することの少ない他の小学校の児童、他学年や大学生との交流の場となった。また、スポーツＤＡＹに関わった人にスポーツの持つ力を感じ、考える機会を提供することを達成することができたのではないかと考える。今年度初のイベントである「多世代交流イベント」では、世代間交流を目的としたが全体の参加者54名中高齢者が1名という結果となった。理由としては、未就学児に企画内容を合わせたことで高齢者のニーズに合わせたイベントを提供できなかったことが挙げられる。今後、このイベントを継続していくために、参加者のニーズをより理解しディスカッションを重ね企画、運営していく必要がある。このようなスポーツの持つ力をさらに多くの方に感じてもらうために、広報活動において例年のチラシの配布、SNSの活用に加えてリーフレットを作成するという新しい取り組みを行った。当プロジェクトの認知度向上を図ると同時に、イベントを知ってもらい、沢山の方に参加してもらう事で地域社会へと広げることができたと考える。またイベントの開催に当たり参加者のニーズを考えたり、イベント開催中の参加者の笑顔や他学年、大学生との交流を体験することで、スポーツの持つ可能性を多く感じられた。

❸ 年間スケジュール

月	企　画	概　要
4	春の交流会	DAN DAN DANCE&SPORTSプロジェクトが主催で新入生に向けて行う交流会を共同で運営。アイスブレイキングを担当し、新入生とプロジェクトメンバーの壁を壊せるような企画を行った。
5	秦野子どもまつり	秦野市主催の「秦野子どもまつり」に参加させていただいた。5つのブースを展開し、子どもたちの楽しめる企画を行った。また、親子参加型のレクリエーションや一定の時間のみ行うパラバルーンなどの新プログラムを実施した。
	ノルディックウォーキング教室（平塚市西部福祉会館・リフレッシュプラザ平塚）	平塚市西部福祉会館、リフレッシュプラザ平塚と連携し、平塚市在住の高齢者を対象に特殊なポールを用いて歩き方の改善をしながら学生との交流を楽しむ教室を開催した。
6	ニコニコ教室	平塚市西部福祉会館と共催で平塚市在住の未就学児の親子を対象としたイベント。未就学児でも楽しむことのできるようなお菓子競争やパラバルーンなどの企画を実施した。
7	でかスポ杯	東海大学チャレンジセンターに所属する学生を対象としたプロジェクト間交流を目的として行うミニ運動会。障害物競争やドッジボールなど競技性の強い種目が多く、例年よりも一致団結している姿が見受けられた。
10	子どもの家（大野・山城・みなと）	平塚市にある3つの子どもの家に訪問し、小学生を対象に遊びを提供する。ピリピリミュージックやマイムマイムなどのレクリエーションを実施し、体を動かすことを通じて交流の機会を提供した。
	ニコニコ教室	平塚市西部福祉会館と共催で平塚市在住の親子を対象としたイベント。未就学児でも楽しむことのできるようなお菓子競争やリトミックなどの企画を実施した。
11	ノルディックウォーキング教室（平塚市西部福祉会館・リフレッシュプラザ平塚）	平塚市西部福祉会館、リフレッシュプラザ平塚と連携し、平塚市在住の高齢者を対象に特殊なポールを用いて歩き方の改善をしながら学生との交流を楽しむ教室を開催した。
12	多世代交流イベント	今年度より初めて開催された幼児から高齢者対象のイベント。クリスマスをコンセプトに、体を動かすことで世代を超えた交流が実現した。企画では、クリスマスツリーづくりやパラバルーンなどの例年にない新しいプログラムを実施した。
	野球教室2018	東海大学体育会男子硬式野球部と連携し、平塚市・秦野市の少年野球チームを対象に指導教室を開催。国内トップレベルの実力を有する大学生が直接子どもたちに指導をし、交流を通じて技術向上ができるような教室となった。
1	バスケ教室2019	東海大学体育会男子バスケットボール部と連携し、平塚市・秦野市のミニバスケットボールチームを対象に指導教室を開催。インカレ優勝を果たした国内トップレベルの大学生による交流を通じた指導により技術向上を目指した。
	第11回東海スポーツDAY	トッケイセキュリティ平塚総合体育館にて、平塚市・秦野市・伊勢原市の小学生を対象に運動会を行った。当日は75名が参加し、アイスブレイキング、大玉ころがし、四方向綱引き、障害物リレーの4種目を実施した。
2	サッカー教室2019	東海大学体育会女子サッカー部と連携し、平塚市・秦野市の小学生を対象に指導教室を開催。女子サッカー部の指導で技術の向上を目指し、当プロジェクトはアイスブレイキングや輪投げ、的あて、ボーリングのブースを展開した。

❹ 協力団体

平塚市西部福祉会館、秦野市役所こども健康部こども育成課、リフレッシュプラザ平塚、平塚市みなと子どもの家、平塚市大野子どもの家、平塚市山城子どもの家、平塚市都市整備部総合公園課、トッケイセキュリティ平塚総合体育館、平塚市立中原小学校（校長大野かおり様）、平塚市少年野球連盟、秦野市少年野球連盟、秦野市ミニバスケットボール連盟、平塚市ミニバスケットボール連盟、平塚市役所教育委員会学校教育部教育指導課、東海大学体育会男子硬式野球部、東海大学体育会男子バスケットボール部、東海大学体育会女子サッカー部

❺ メディア掲載・放映

なし

サイエンスコミュニケーター

湘　南

達成目標　理科離れを防ぎ、科学の楽しさを通して人と人とのつながりをつくる

学びのテーマ　積極的なコミュニケーションをとり、自らの役割を考えることで企画を成功させる方法を学ぶ

リーダー	田澤美奈	文学部歴史学科東洋史専攻	2年
サブリーダー	羽場拓海	理学部化学科	2年
広報リーダー	井出通利	工学部原子力工学科	2年
会計	金野光流	工学部応用化学科	2年
コーディネーター	萱場隆人	湘南健康推進室	
アドバイザー	岡田工	現代教養センター	

（参加人数　53名）

❶ 活動概要

本プロジェクトは、「理科離れ」という社会問題を解決していくために、様々な学部・学科を超えた学生の集まりによって立ち上げられたプロジェクトである。特に理科離れが起こりやすい小中学生を対象とした実験ショーや実験工作教室などのイベントを企画実施している。加えて、科学イベントを通じて参加者の方々とコミュニケーションをとることで人と人、人と科学をつないでいくことができるよう活動している。

❷ 一年間の達成目標と学びのテーマに対してどのような活動を行い、どのような学びがあったか

私たちサイエンスコミュニケーターは、「理科離れを防ぎ、科学の楽しさを通して人と人とのつながりをつくる」を達成目標に掲げ、各地で実験ブースや実験ショーを行っている。企画を成功するためには、メンバー間の「信頼関係」が大切であると考え、日々の情報共有を十分に行い、メンバー間での積極的なコミュニケーションを実践している。その結果、多くの企画を成功に導くことができた。8月3日（金）に本プロジェクトが主催した「世界一行きたい科学広場in湘南2018summer」では、出展者募集からはじまり、会場確保、ポスターやチラシの作成、また地域連携課や各市教育委員会の協力のもと近隣小中学校へのチラシ配布、当日の会場設営など、学内外を問わず多岐にわたり交渉と調整を行った。当初の予定を大幅に超え1000人以上に来場いただき、大きな問題もなく開催できた。このイベントを通し、私たち一人ひとりが積極的にコミュニケーションをとり自らの役割を考え、チームや担当の垣根を越えお互いが協力し、情報共有ができたと確認をした。来場者からのアンケートでは９割以上の方から「満足した」との回答をいただき、目標達成につながったと考える。

一方で理科離れを抑制するためには、今、理科を好きな子どもが「嫌い」や「苦手」という意識を将来持たず、理科を「好き」、「楽しい」と実践を通して感じることが重要である。今年度は、科学館や大規模な科学イベント、さらにショッピングモールや児童館という多くの子どもや家族が集まる場所とし30箇所を越えるイベントに出展した。普段、科学への興味が薄い子どもたちでも気軽に参加できるよう「場の工夫」をした。さらに「理科は難しいものではなく、楽しいもの」という思いになれるように簡単で分かりやすい工作等を行い、内容を工夫した。科学館と大規模科学イベントでは、もともと科学に興味ある参加者のことも配慮し、「どうしてそのような変化が起こるのか？」と知識の深い部分にも多少踏み込みつつ、難解にとならないよう留意した説明をした。このように理科が好きな子どもたちには「理科をもっと知りたい！」と思えるような、学習意欲の向上が期待される内容を目指した。「理科離れ」が課題になっているのは、子どもたちが「理科に触れあう機会」が徐々に減ってきているためだと考える。本プロジェクトは、イベントを通して理科と気軽に触れ合う機会を提供し、参加した子どもたち、家族、地域住民など多くの方が理科の面白さを共有、共感いただく場をつくりたいと考えている。このような人と人とのつながりをつくることによって、「理科が好き」といった言葉を頻繁に耳にするような社会が実現できるよう、これからも活動を続けていきたいと思う。

❸ 年間スケジュール

月	企　画	概　要
4	子ども科学館フェスティバル	伊勢原市立子ども科学館主催で毎年、同市内に住む子どもたちを対象に開催されている。本プロジェクトは『人工いくら』等、科学に関するブースを3種類展開した。
7	作ろう！遊ぼう！科学広場	本企画は平塚市内の大型ショッピングモールであるOSC湘南シティにて隔月で開催されているイベントで、ショッピングモールでの開催のため、普段科学館に縁の無い方も対象にイベントを行うことができる。
8	世界一行きたい科学広場in湘南2018 summer	本プロジェクトが主催となって行われた大規模科学イベント。多くの団体を招くことで、来場者が1000人を超える盛大なイベントとなった。
	中高生の理科体験教室	科学に関心のある付属中学生および高校生を対象にしたイベントで、理系学部への進学を考えてもらう1つの機会になることを目的として開催。今回は『光、色空気』をテーマにした実験を行った。
	科学実験教室	本企画は、平塚市内3か所ある学童保育施設で小、中学生を対象とした体験型実験企画を3日間に分けて開催。今回は、『空気の実験』と『光の実験』の2つの実験ショーを行った。
	第10回サイエンスリンク	NPO法人サイエンスリンクが毎年開催しているイベントであり、子どもたちに科学に関心を持ってもらうこと、他団体との交流をすることを目的として開催。今年度は、来場者による人気企画投票で第2位を受賞した。
9	和歌山県立那智勝浦町立勝浦小学校・色川小学校実験教室	本企画は「座学だけでは味わうことのできない科学を楽しんでもらいたい」を目的に開催。本イベントで行ったアンケートでは、9割以上の子どもが「理科が好きになった」と答えた。
11	親子で楽しもうサイエンス	平塚市立崇善小学校のPTAから依頼を受け、実施。実験ショーと4つのブースを展開し、比較的規模の大きいイベントとなったが、メンバーで協力して行うことができた。
	PTA収穫祭	本企画は秦野市立北小学校のPTA主催のイベントで毎年出展。今年は『くるくるステンドグラス』の工作、『真空実験』のブースを展開した。
2	サイエンスカフェ	本企画は科学技術の専門家と一緒に軽食をとりながら科学について気軽に語り合うことを目的としたイベント。今回はインターネット望遠鏡を用いながら櫛田敦子教授と天体観測を行った。

❹ 協力団体

OSC湘南シティ、特定非営利活動法人サイエンスリンク、神奈川県立青少年センター科学部科学支援課、伊勢原市立子ども科学館、特定非営利活動法人ガリレオ工房、神奈川県平塚市教育委員会、神奈川県秦野市教育委員会、神奈川県伊勢原市教育委員会、和歌山県那智勝浦町教育委員会、白金台児童館、秦野市社会福祉協議会

❺ メディア掲載・放映

5/9 J:COM「地域情報満載デイリーニュース」（TV）、8/22 神奈川県立青少年センター科学部科学支援課「神奈川県青少年科学体験活動NEWS 第129号」（情報誌）、9/4 神奈川県立青少年センター科学部科学支援課「神奈川県青少年科学体験活動NEWS 第132号」（情報誌）、2019/2/8 タウンニュース秦野版（情報誌）、2/15 神奈川新聞、2/19 湘南ケーブルネットワーク「ワイド情報カフェ湘南館」（TV）

キャンパスストリートプロジェクト

湘　南

達成目標　広報の幅を広げることで活動に対する認知度を高め、地域住民と学生双方が交流できる場を創出する

学びのテーマ　自ら行動し、問題を解決する力を学ぶ

リーダー	紅谷綾音	教養学部芸術学科音楽学課程	2年
サブリーダー	神尾一誠	教養学部人間環境学科社会環境課程	2年
サブリーダー	辻陸斗	教養学部人間環境学科社会環境課程	1年
広報リーダー	犬塚響	文学部広報メディア学科	2年
会計	伊藤早綾可	教養学部芸術学科音楽学課程	2年
コーディネーター	村井健太郎	チャレンジセンター	
アドバイザー	池谷美衣子	現代教養センター	

（参加人数　30名）

❶ 活動概要

本プロジェクトは、地域住民と学生の架け橋となることを目指し、住民と学生との関わりを生み出すものである。具体的には、大学近隣に暮らす子どもから高齢者まで、多様な住民が学生とともに楽しめる大小様々なワークショップ・イベントを学生主体で企画・運営する。このように、地域住民と学生が積極的な関係を構築する場を通年で提供することで、地域住民と学生双方から永く愛される「街と大学」の実現を目指す。

❷ 一年間の達成目標と学びのテーマに対してどのような活動を行い、どのような学びがあったか

私達は一年間の達成目標として、「広報の幅を広げることで活動に対する認知度を高め、地域住民と学生双方が交流できる場を創出する」を掲げ、活動してきた。この目標を達成するために、様々な活動を行ったが、特に意識して行った活動が以下の3つである。

①【TOKAI音食WEEK2018】

このイベントは、音と食の2つのカテゴリーから地域と学生をつなげることを目的として開催している。本年度は、企画にマンネリ化が見られることを踏まえて、より一層地域の方と学生が交流できるように、東海大学駅前にある花屋「FLEUR花もと」さんに協力していただき、「フラワーアレンジメント・ワークショップ」を新たに行った。その結果、音食WEEKに協力していただいた出演者の方やお店の方、来場者にも体験していただくことが出来た。しかし、参加者を増やすという問題に対しては追及が足りなかった面もあり、予想参加者５０人に対し、実際には３０人程度とはるかに下回ってしまった。

②【クリスマスU-night2018】

上記①の反省を活かし12月に行った本イベントでは、一ヶ月前からのポスターを掲示したり、北矢名日の出自治会の方に協力を仰ぎ、近隣の小学校や中学校にもビラを配布していただいた。また、メンバー自らが近隣の幼稚園に足を運んで、企画の宣伝にも取り組んだ。さらに、前年度までは東海大学駅前商店会婦人部の方のご好意で豚汁の無料配布を行っていたが、本年度は、一層の協力をお願いし、無料配布をライトアップイベントとワークショップの2回行った。ポスターにもその旨を大々的に宣伝したことで、地域の方と学生、地域の方と地域の方、学生同士での交流をする場を提供することが出来た。豚汁を地域の方が作って配布し、学生が「ありがとうございます」と笑顔で受け取るという小さな交流が何度も生まれた。また、協力していただいた婦人部の方々にも大変喜んでいただき、学生とともにイベントを成功させたという一体感や達成感を共有することが出来た。

③【地域マップ作成】

この企画を始めようと思ったきっかけは、地域の魅力を発信する私たちが一層この地域のことを知らなければいけない、視覚的に地域のことが知れる何かを作ろうという議論の結果から始まった。このマップを作成する過程で、東海大学近隣の各店舗の方から直接お話を聞くことで新たに地域を知るきっかけができ、より多くの魅力を発見することが出来た。完成したマップを東海大学駅前商店会や協力していただいた店舗や学内で配布・広報することで、活動の成果を広く共有していく。

一年間を振り返って、現在の私達は大学周辺の店舗の方、幼児や障がい者の方との交流を主にしているが、地域にはもっと多様な人が暮らしているはずだという気づきがあった。そのため今後は、より多様な地域住民の方々に出会い、交流の幅を広げられるように、例えば高齢者の方との交流の場を設けたり、1回きりのイベントにせず、継続的に関係が作れるイベントを企画していきたい。そして、私たちが媒介となって、他の活動や人をつなぐ役割まで出来るようにしたい。

❸ 年間スケジュール

月	企　画	概　要
4	障がい者自立支援施設秦野精華園セミナー&学習プログラム	大学近隣の障がい者自立支援施設社会福祉法人かながわ共同会秦野精華園に行き、秦野精華園でどんなことをしているのかを現場のスタッフさんから話を伺った。また利用者に対し簡単な算数などの学習を支援した。
6	TOKAI音食WEEK 2018	大学周辺の音楽活動団体・食店舗を大学に招き、大学から近隣地域（秦野市・平塚市）を盛り上げた。音楽を聴きながら食を楽しんでいただき、地域の方と学生が交流できる場を創出した。
9	秦野精華園の皆さんとの利用者交流会	本プロジェクトメンバーと秦野精華園の利用者さんが楽しく交流できるレクリエーション企画として、ペットボトルボーリングとペットボトル輪投げを行った。
	東海大学駅前花壇植栽	北矢名日の出自治会・東海大学駅前商店会と協力して、東海大学前駅の花壇の花の植え替えや、装飾を行った。
12	大根幼稚園と連携したペットボトルライト作成	クリスマスU-nightで駅前に飾るペットボトルライトの作成を企画・準備した。その上で、大根幼稚園を訪問し、ペットボトルライトの作成を、園児たちに行ってもらい、69個のライトを完成させた。
	クリスマスU-night ツリー設営	東海大学前駅駅前広場に高さ約7mの生木のツリーを設営し、冬の季節感を演出するとともに、多様な地域住民や多くの学生が日々利用する駅前広場に、華やかさと賑わいを作り出した。
	クリスマスU-night ライトアップイベント	地域の方や学生を招き、駅前広場に飾ったツリーの点灯後、学内外で活動している音楽団体にパフォーマンスをしていただいた。また、婦人会の方に協力していただき、豚汁の無料配布を行った。
	クリスマスU-night ワークショップ	駅前広場のツリーのまわりで、東海大学周辺で活躍する様々な協力団体の方々にワークショップ形式で出店していただき、東海大学前駅を盛り上げた。本プロジェクトはクリスマスのメッセージカード作成をしていただいた。
2	子どもサイエンスフェスティバル秦野大会	神奈川県秦野市で開催された子どもサイエンスフェスティバルに、プロジェクトとして初めて出展した。具体的には、スライム作りのブースを企画し、延べ150人程度の参加者にスライム作りを楽しんでもらった。
3	ぶらりTOKAIマップ ～4年間で一度は行ってみたい～	東海大学周辺をあまり知らない方に地域の魅力を発信するため、大学周辺の食店舗の紹介や、東海大学前駅から大学へのいろんなルートを掲載し、より地域のことを知ってもらえるように現在作成中。

❹ 協力団体

株式会社ヨネザワ楽器イベント事業部、社会福祉法人かながわ共同会秦野精華園、FLEUR花もと、有限会社小川電気大根店、北矢名日の出自治会、東海大学駅前商店会、東海大学駅前商店会婦人部、フレッシュフーズ片野、秦野市立大根幼稚園、秀和ビルメンテナンス株式会社湘南営業所、Jlodge、RAINDROP MUSIC、秦野観光和太鼓、くるみ、ガトーしらはま、みちぱん秦野店、こちらラジオ番組制作部、秦野市観光協会、中華飯店カフカ、菓子工房アンデス橋本、いっぷく亭「みかんの木」、カフェフルフル、唄い人千明、東海大学チャレンジセンター・サイエンスコミュニケーター、東海大学チャレンジセンター・DAN DAN DANCE ＆ SPORTSプロジェクト、東海大学望星会お笑いサークルラフタ

❺ メディア掲載・放映

12/14 タウンニュース秦野版（情報誌）

Tokai Formula Club

湘　南

達成目標　第16回全日本学生フォーミュラ大会において総合10位以内の成績を獲得する

学びのテーマ　学生フォーミュラ車両製作・大会出場を通してものつくりと自己実現の総合力を学ぶ

リーダー	月村雄太	工学部動力機械工学科	3年
サブリーダー	坂田玲音	工学部動力機械工学科	3年
サブリーダー	当麻曙音	工学部動力機械工学科	3年
広報リーダー	村澤智	工学部動力機械工学科	2年
会計	村田凌太朗	工学部動力機械工学科	3年
コーディネーター	関根啓由	技術支援課	
アドバイザー	加藤英晃	工学部動力機械工学科	
	成田正敬	工学部動力機械工学科	
	高橋俊	工学部動力機械工学科	
	吉永昌史	工学部動力機械工学科	
	森下達哉	工学部動力機械工学科	
	山本建	工学部動力機械工学科	

（参加人数　77名）

❶ 活動概要

日本最大級の学生ものつくり・コンペティションである「全日本学生フォーミュラ大会」に向けて小型レーシングカーを製作し、大会に出場することによってものづくりの総合力を養う。活動において培う様々な知識・経験を用いて、次世代の日本の自動車技術ならびに各種産業の発展・振興に資する人材となることを目指す。海外の強豪校も多数参戦する日本大会において、今年度は総合10位以内を獲得することを活動目標とした。

❷ 一年間の達成目標と学びのテーマに対してどのような活動を行い、どのような学びがあったか

群雄割拠の様相を呈している今の学生フォーミュラ大会において、100チームに迫る参加台数の中で総合10位以内を獲得する、ということは決して簡単ではない。そのために、今年度プロジェクトでは、「ものづくりの総合力」ということばを特に重視して取り組んできた。

大会では、もちろん実際に車両を走らせて各種タイムを競う種目も存在するが、車両の設計プロセスの妥当性を書類で問われたり、自分たちが製作した車両を実際に仮想マーケットに販売するためのプレゼンテーション能力が問われる審査も存在する。そして、総合的な成績は、これらすべての審査の成績を合計した得点で競われる。そのために、メンバー全員で、目先の問題や物事だけにとらわれることなく、常に中長期的な視点を持ち、その中でいますべき行動は一体何なのか、という思考を持てるように心がけた。

大会は例年9月に行われるので、2018年度大会に参戦するプロジェクトは、実質2017年9月から始動している。プロジェクトとして特に重点を置いて取り組んだことは、「目的・目標意識の徹底」、「役割・責任の明確化」の2つである。

1つ目に関して、ここ数年TFCとしての目標は「優勝」「動的種目完全制覇」といったものだったが、そこに至るまでのプロセスが明瞭ではなく、プロジェクト活動が進んでいくと、どうすれば目標にたどり着けるのか、目標には現実性がないのではないか、といった雰囲気が漂い始め、モチベーション低下につながってしまうことがあった。そこで今年度は、チームビルディングに多く時間を割き、メンバー同士このプロジェクトに求めているものは何なのか、何をすれば目標を確実に達成できるのか、といったディスカッションを行った。結果、総合10位獲得という目標に向かっていったとき、目の前に問題が立ちはだかったとしても、チーム一丸となって解決することができた。

2つ目に関しては、例年行っている組織構成に加えて、役割を常にホワイトボードに掲示したり、チームとして定期的に再確認を行うことで、チーム全員が今自分は何の作業をすれば良いのか、誰に連絡やアドバイスを取ればよいのか、といったことを明確にすることができ、活動の効率アップに繋がった。

車両製作・開発においても、チームビルディングがしっかりとしていたので、車両の方向性や開発指針も、一貫性のあるものとなった。結果、2018年度日本大会においては、デザイン審査やプレゼンテーション審査といった、今までチームが苦手としていた審査においても好成績を残すことができ、総合成績は8位と、自分たちで立てた目標をしっかりと達成することができ、何物にも代えがたい感動と達成感をチーム全員で味わうことができた。この活動で得た経験はメンバー一人ひとり異なるが、そのどれもが貴重であり、将来に繋がるものであると確信している。

❸ 年間スケジュール

月	企　画	概　要
5	第16回 全日本学生フォーミュラ大会において総合10位以内の成績を獲得する	当初の予定からこそ遅れてしまったが、なんとか5月中に車両を完成させることができた。初めて車両が動き出した瞬間、チーム全員で喜びを分かち合った。
6	かながわ学生ビジネスプランコンテスト	実際に産学連携を行っているプロジェクトのひとつとして紹介していただき、チームと企業との連携や、学生フォーミュラ活動の意義などをプレゼンテーションさせていただいた。
7	キッズエンジニア2018車両	社会貢献活動の一環として、自動車技術会さまが主催するイベントに出展した。2日間でのべ500人以上の子どもたちに車両に試乗していただくことができ、活動の知名度向上にも繋がった。
8	世界一行きたい科学広場 in 湘南2018 summer車両・ブース	新しい取り組みとして、春に入学した1年生が主となってイベントに出展した。過去車両を用いたシミュレーターとペーパークラフトの2本立てとなり、イベント中子どもたちの笑顔が絶えることはなかった。
	自動車技術会三支部合同試走会	「プレ大会」と呼ばれる大きな試走会で、毎年この時期に行われている。3日間トラブルに悩まされ続けた試走会だったが、この悔しさを全員で味わったこともチーム力の向上に繋がった。
	自動車技術会関東支部主催 ツインリンクもてぎ試走会	関東地区の大学がほぼ全校集結する、大きな試走会。効率よくトラブルを修復できたことで車両の調子は上向きとなり、20校を超えるチームの中でトップタイムを出すことができた。
	第4回 富士スピードウェイ試走会	大会前最後の試走会。ここでは目立ったトラブルも起きることなく、約100kmを2日間で走破することができた。十分な走行を行えたことで、自信を持って大会に臨むことができた。
9	第16回 全日本学生フォーミュラ大会	初日から台風に悩まされた5日間だったが、今までの活動で培ったチーム力を存分に発揮することができ、96チーム中総合8位という成績を獲得することができた。

❹ 協力団体

スズキ株式会社、株式会社デンソー、トタル・ルブリカンツ・ジャパン株式会社、有限会社N.A.C.T、株式会社井上ボーリング、株式会社日本ヴューテック、及川製作所、武藤工業株式会社、株式会社平塚イトウネジ、株式会社サイアン、丸紅情報システムズ株式会社、AVO/MoTeC JAPAN、株式会社ミスミグループジャパン、ソリッドワークス・ジャパン株式会社、株式会社ニフコ、エヌ・イー有限会社、HPCシステムズ株式会社、大井松田カートランド、有限会社丸山ラジエーター工作所、有限会社福岡ゴム工業所、株式会社IDAJ、金子歯車工業株式会社、NTN株式会社、日立金属株式会社、株式会社和光ケミカル、東芝機械株式会社

❺ メディア掲載・放映

7/17 日刊自動車新聞（新聞）、8/1 TOKAI（情報誌）、9/12 クリッカー（WEB）、9/19 丸紅情報システムズ株式会社様公式サイト（WEB）、10/15 モーターファン イラストレーテッド vol.145（雑誌）

ライトパワープロジェクト

湘　南

達成目標　大会に出場し最高の記録を樹立するとともに社会に貢献する活動を展開する

学びのテーマ　メンバーとしての自覚を持ち、努力する素晴らしさを学ぶ

リーダー	長田達也	工学部電気電子工学科	3年
サブリーダー	小野田樹晃	工学部動力機械工学科	2年
サブリーダー	露木悠葵	工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻	2年
広報リーダー	山下善基	工学部電気電子工学	3年
会計	石渡智央	工学部機械工学科	3年
コーディネーター	平島滋義	チャレンジセンター	
	島村祐太	チャレンジセンター	
アドバイザー	木村英樹	工学部電気電子工学科	
	福田紘大	工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻	
	池田知行	工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻	
	佐川耕平	工学部電気電子工学科	

（参加人数90名）

❶ 活動概要

省エネルギーと創エネルギーを軸に、ソーラーカー・電気自動車・人力飛行機の設計・製作を通してものつくりについて学ぶ。そのうえで、ソーラーカーの国際大会や鳥人間コンテストに出場し、優勝することを目標とし活動を行う。また、展示会やイベントなどで車体・機体を展示するほか、大学近隣の地域社会にものつくりの楽しさを伝える企画を実施する。

❷ 一年間の達成目標と学びのテーマに対してどのような活動を行い、どのような学びがあったか

ソーラーカーチームは、南アフリカ共和国で行われたSasol Solar Challenge 2018 South Africaにおいて、3,941kmを走り準優勝を成し遂げた。これは、レース戦略を見直したことやパンクなどのトラブルにも交換のタイムロスを少なくできたことが要因だと考える。しかし、総合優勝したオランダのデルフト工科大学に比べ、チーム力が劣っていることを実感した。また、日本国内で行われたWorld Green Challengeにメカトロマイスタープロジェクトのサポートメンバーとして参加した。3日間の耐久レースは、条件は違えど海外のソーラーカー大会に近いものを感じた。年に1度しかない海外大会では学び切れない部分を補うためにも、国内大会への出場は必要だと感じた。

電気自動車チームでは、秋田県大潟村で行われたWorld Econo Move 2018に参戦し、電気自動車鉛蓄電池部門オープンクラスとWorld Econo Move LIGHT Aクラス部門に出場した。結果は、鉛蓄電池部門において総合5位となり、昨年度から10位順位を上げることが出来た。また、LIGHT Aクラスにおいても昨年度から一つ順位を上げ、準優勝を成し遂げた。これは、昨年度と比較し大学内にて多くの試走を行うことが出来たからだと考える。しかし、大会前の練習走行においてケアレスミスが多く発生してしまうなど大会前の準備が十分に出来ていないということを実感した。そのため、大会に持ち運ぶ物品リストの再確認や、車体・計器類のチェックを十分に行う必要があると感じた。

人力飛行機チームでは、HPA飛行会において準優勝を成し遂げることが出来たが、2017年度の大会記録には及ばない結果となってしまった。しかし、メンバーそれぞれが自分の役割を自覚し行動をしたことで大会での機体の組み立てを円滑に進めることが出来た。また、2018年度は機体の操舵性能の向上や製作過程を見直したことにより、テストフライトでの安定した長距離飛行を成功させることが出来た。

社会貢献活動として、地域の小学生を対象とした3種類の企画を開催した。それぞれイベントの規模は異なるが、3種の企画合わせて200人近い参加者を募ることが出来た。アンケートの結果からキット製作や講義を通して、ものつくりに関心を持っていただくことが出来たと考える。その他にも、企業なども出展する展示会や建学祭、オープンキャンパスなどで展示活動をすることで、多くの方々に私たちの活動を知っていただいた。また、Sasol Solar Challenge 2018でともに出走したスイスのソーラーカーチーム"Solar Energy Racers"のメンバーや和歌山大学ソーラーカーチームのメンバーが作業場を訪れ、車体製作について意見交換を行った。

これらの活動から、チームとしての活動を円滑に進めるために、メンバー各々が自分の役割を理解し行動する「チーム力」の大切さを学ぶことが出来た。

❸ 年間スケジュール

月	企　画	概　要
4	モーターファンフェスタ2018 in富士スピードウェイ	富士スピードウェイで開かれる、来場者2万人を超えるイベント。試乗会やパレードラン、エキシビジョン走行など様々なプログラムが盛りだくさんな車の祭典。17TOKAI CHALLENGERを展示し、グリッドウォークとデモランに参加した。
5	2018 World Econo Move	秋田県大潟村で行われる、2018 World Ecomo Move GPの開幕戦。高校生から社会人のチームまで全国から集まりレースを行う。鉛蓄電池部門総合5位、LIGHTAクラス準優勝を納めた。
7	MiSK財団ソーラーカー研修対応	サウジアラビア王国のMiSK財団の支援を受けた学生たちを対象にした研修プログラムを実施。次世代エネルギー開発をはじめとしたさまざまな分野についての学びを深めてもらった。
	アメリカ・ローレンス市の中高生対象の展示対応	平塚の姉妹都市であるローレンス市の中高生がものつくり館を訪問。プロジェクトの活動内容や、国際大会についての紹介を行った。
	PVJapan2018	太陽光発電協会が主催する、太陽光発電産業のキープレーヤー企業が一堂に集まる大きな展示会。ソーラーカーの展示を行った。
	エコカー教室	秦野市立大根小学校の4年生を対象に、メンバーがソーラーカーと省エネについて講義を行い、電気自動車とソーラーカーの走行も行った。企画後にたくさんのお礼の手紙をいただくことが出来た。
8	WORLD GREEN CHALLENGE SOLAR & FC CAR RALLYE 2018	大潟村で行われるソーラーカーの大会。1日8時間×3日間の24時間耐久レースとなっている。メカトロマイスタープロジェクトの手伝いで参加した。
	HPA飛行会	静岡県、富士川滑空場において開催された「HPA 飛行会2018」に参加した。飛行会では、実際に自分たちが製作した飛行機を飛ばす「飛行展示」や来場者の方に機体説明を行った。
9	ものつくり教室	近隣の小学生を対象に、ものつくりの体験イベントを開催した。イベントでは、人力 飛行機チームの紹介や飛行機キットの製作を行い、ものつくりの楽しさや素晴らしさを感じていただいた。
	Sasol Solar Challenge 2018	南アフリカで開かれる走行距離を競うソーラーカーレース。8日間の日程でプレトリアからステレンボスまで走り抜ける。総走行距離3,941kmで準優勝を納めた。

❹ 協力団体

パナソニック株式会社、東レ株式会社、東レ・カーボンマジック株式会社、トヨタ自動車株式会社、株式会社ブリヂストン、株式会社ミツバ、KYBモーターサイクルサスペンション株式会社、日本マイクロソフト株式会社、株式会社ソフトウェアクレイドル、ビジュアルテクノロジー株式会社、ダッソー・システムズ株式会社、日野自動車株式会社、株式会社ベクター、有限会社三島木電子、国立研究開発法人産業技術総合研究所、日本ケミコン株式会社、株式会社ジェイテクト、株式会社和光ケミカル、植木プラスチック株式会社、飯田通商株式会社、株式会社日本デジコム、石塚工業株式会社、株式会社日本デジコム、株式会社パトライト、株式会社三協、株式会社ソーアップ、株式会社プロジェクト・ミュー、サンスター技研株式会社、国立研究開発法人科学技術振興機構 CREST、ラップジャパン株式会社、人気酒造株式会社、株式会社島半、鹿島化学金属株式会社、NPO法人クリーン・エナジー・アライアンス、一般社団法人日本太陽エネルギー学会、三栄書房株式会社、CQ出版株式会社、東海大学情報技術センター、太陽光発電協会、外部アドバイザー池上敦哉様、技術士西海秀文様、プロジェクトOB（菊田剛広様、徳田光太様、新井隆史様、平澤浩人様、竹内豪様）

❺ メディア掲載・放映

8/22 日本テレビ「1周回って知らない話」（TV）、1/22 TOKYO MXテレビ「モーニングCROSS」（TV）、5/6 秋田魁新聞（新聞）、7/16神奈川新聞（新聞）、9/29 読売新聞（新聞）、10/4 日刊自動車新聞（新聞）、10/5 毎日新聞（新聞）、10/21 読売新聞（新聞）、11/2 科学新聞（新聞）、4/3 三栄書房「MOTOR FAN Illustrated Vol. 139」（書籍）、6/1 「MOTOR FAN　Illustrated Vol.140」（書籍）、7/5 公益社団法人日本設計工学会「設計工学 Vol.53 No.7」（書籍）、7/20 タウンニュース秦野版（情報誌）、10/18 タウンニュース平塚版（情報誌）、4/22 Motor Fan（WEB）、タウンニュース秦野版（WEB）、9/24 Independent ONline（WEB）、9/26 Independent Online（WEB）、9/27 Wheels 24（WEB）、10/7 デジタル毎日（WEB）、10/18 タウンニュース平塚版（WEB）、10/21 YOMIURI ONLINE（WEB）、12/20 Microsoft社ホームページ（WEB）

東海大学学生ロケットプロジェクト

湘　南

達成目標　大型化に向けたロケットの開発と効率的に進めるための組織づくり

学びのテーマ　外部の団体と積極的に交流をし広い視野を持つ

リーダー	根子隆誠	工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻	4年
サブリーダー	齋藤楓士	工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻	4年
サブリーダー	林麻優美	工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻	4年
広報リーダー	堀井滉大	工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻	2年
会計	阿部宗生	工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻	4年
コーディネーター	奥山三喜	事務課	
アドバイザー	那賀川一郎	工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻	
	森田貴和	工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻	

（参加人数65名）

❶ 活動概要

学生団体で初めて高度100kmに到達するロケットの打上げを目標とするものづくり団体である。安価で安全なハイブリッドロケットを採用しており、より高高度に到達出来るように年二回、打上実験を実施している。製作しているロケットは学生が設計、製作しており既製品をほとんど使用していない。
また、ロケット製作以外にも他大学や企業でロケットを取り扱っている団体の方とも広報活動の場などで積極的に交流を行っている。

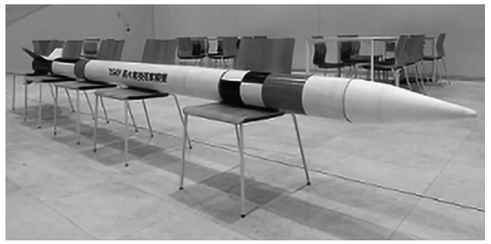
❷ 一年間の達成目標と学びのテーマに対してどのような活動を行い、どのような学びがあったか

今年度は4年ぶりに夏の能代宇宙イベント海打ち試験において成功を収めた。なお、その際に打ち上げた機体では長距離での新型テレメータの実証を達成しており、高高度機体の打上実験に向けて一つの難関を突破するという成果を上げている。また、最終報告会にて高高度実験機体モックアップは高度10 kmに到達するロケットの性能、重量、機体長をエンジンの燃焼実験や性能計算、シミュレーションから算出した結果から製作したものである。これは、中間目標としている高度10 kmに到達する機体製作への目途が経ったということを示し、1年間の達成目標として掲げている「大型化に向けたロケットの開発と効率的に進めるための組織づくり」の前半部である大型化に向けたロケットの開発について十分に達成できたと言える。

また、上記のモックアップ作成にあたり、今までのように各コンポーネント毎に開発や設計を進めていては問題に直面してしまうことが予想され、全体で様々なことを解決していかねばならないことがより明確となった。今年度は冬の打上げを行わず来年度の夏の打上げへの準備期間を設けた。これにより、設計・製作を行う担当者は十分な開発を行う間、まとめ役であるプロジェクトマネージャ側は組織づくりの見直しを図ることができた。今までは規模が小さかったことから少人数や短期間であってもなんとか無理をして製作を終了させることが出来ていたが、今後の大型機体において同様のやり方では通用せず、また積み重ねてきた経験や知識・技術を持続させていなければならない。そこで、今年度からは引継ぎ資料を兼ねた設計審査資料をプロジェクトの中途段階で作成し、分かりやすく番号付けを行う制度を導入した。これは例年、プロジェクトの終盤に振り返りとして引継ぎ資料を作成するようメンバーに促していたが、一度にすべてを振り返らねばならないこと、プロジェクト自体が終了していることから筆が進まず各コンポーネントからの回収が難航していたことを受けて改善したものである。設計審査の発表資料を兼ねているため、作成しないとプロジェクトが止まってしまうことから回収漏れを防ぐことが出来る。また、一度の打上実験に対して一つのプロジェクトを進めてきたが、今後は高高度実験機体に対して一つの大きなプロジェクト、その中に燃焼器や計測機器についてなどさらに小さなプロジェクトをいくつも擁する制度の導入を検討している。これは機体が大型化していることから全体で抱える問題やリソース面について検討しなければならないことが増えるためプロジェクトマネージャの負担軽減を目的としている。学生団体であるが故に企業の真似をするだけではなく、学生生活との両立をいかに果たすかも今後の大きな課題となることへの気付きを得た。

❸ 年間スケジュール

月	企　画	概　要
4	新歓燃実	新入生への新歓活動を主目的とした自作エンジンの燃焼実験。
5	各年度初めの講習	安全講習会（全体向け）、システム講習（新入生向け）、SRP講習（新入生向け）など毎年年度初めに行う講習安全講習会は参加しなければ工作機械は扱えない規則としている。
7	UNISEC総会	NPO法人UNISECの総会に参加
8	世界一行きたい科学広場	サイエンスコミュニケーター主催の世界一行きたい科学広場に出展H-46を模したペーパークラフトの製作、飛ばしてみるまでをセットに子ども向けの企画を用意した。好評を博し、イベントの途中には予定分が終了した。
	Maker Faire Tokyo2018	東京ビックサイトにて行われたものづくりを行う団体、企業が交流するイベントに出展昨冬打上げ予定だったH-46関係のものを展示した。
	第14回能代宇宙イベント	秋田県能代市で行われた宇宙イベントに参加、イベントでは陸打ちと海打ちと2機体の実験、安全シンポジウムに自作モータについて発表を行った。またポスターセッションにて最優秀賞、海打ち実験ではMHIアワードを受賞した。
10	ロケット交流会	日本科学未来館にて実施、他大学や企業でロケットを扱う団体、また一般の方とも交流を行った。
	UNISEC WS	NPO法人UNISECのWS（冬の集まり）に参加。
3	とびもの学会	飛ぶものについて幅広い分野の方と交流、最終報告会にて初公開した高高度実験機モックアップを展示予定。
	春休みモデルロケット教室2019	東海大学湘南校舎の近隣の小中学生を対象にモデルロケット教室を実施する。オリジナルのロケットを一から製作、打上げを体験してもらいものつくりの楽しさやロケットについて知ってもらうことを目的としている。



❹ 協力団体

北海道大樹町役場企画課、国土交通省東京航空局帯広空港出張所、国土交通省東京航空局釧路航空事務所、国土交通省札幌航空交通管制部、国土交通省航空宇宙管理センター、北海道釧路方面広尾警察署、航空大学校帯広分校運用課、インターステラテクノロジズ株式会社、一般社団法人あきた宇宙コンソーシアム、上町すみれ会、夢工房咲く・咲く、特定非営利活動法人有人ロケット研究会、能代宇宙イベント協議会、株式会社ホーペック、有限会社スリーホープ、GEOSPORTS、Photron、有限会社タイプエス

❺ メディア掲載・放映

8/24 北羽新報（新聞）、11/20 毎日新聞（新聞）

Tokai International Communication Club

湘　南

達成目標　繋ぐ～お互いの違いを認め合い、理解し合う～

学びのテーマ　自分や周囲の役割を理解し、互いに連携・協力することを学ぶ

リーダー	佐本未羽	理学部化学科	2年
サブリーダー	松木菜々子	文学部英語文化コミュニケーション学科	2年
サブリーダー	本田光	文学部ヨーロッパ文明学科	2年
広報リーダー	増子実和	工学部生命科学科	2年
会計	山田くるみ	文学部英語文化コミュニケーション学科	2年
コーディネーター	雨木秀文	入試広報課	
アドバイザー	田口香奈恵	国際教育センター 留学生支援教育部門	

（参加人数61名）

❶ 活動概要

私たちTICCは「多文化共生社会の実現」を目指し、日々活動を行っている。活動を「学習支援」「異文化理解」「国際交流」という３つの視点から捉え、それぞれ様々なイベントを行っている。学習支援を担っている『にこティー教室』では秦野市の小・中学校に通う外国に繋がりのある子どもたちを対象に学習支援や遊びを通して子どもたちの居場所作りをしている。異文化理解を担っている『異文化理解ワークショップ』では、秦野市の小学校に通う小学生とその保護者を対象に、海外の文化や慣習の紹介や多文化共生について知り、考えてもらうイベント作りを行っている。その他にも、異文化理解を担っている『シンポジウム』では、東海大学生や教職員の方々、地域の方々を対象に国際問題や多文化共生について考えてもらうイベント作りを行っている。国際交流を行っているForeign Students Communication（通称FSC）では、東海大学に通う留学生と日本人学生の交流を目的に、スポーツや食事を通して交流できるイベントを実施している。

❷ 一年間の達成目標と学びのテーマに対してどのような活動を行い、どのような学びがあったか

私達TICCは今年度の達成目標を「繋ぐ～お互いの違いを認め合い、理解してもらう～」と設定し、学びのテーマを「自分や周囲の役割を理解し、互いに連携・協力することを学ぶ」とした。目標を達成できたかどうかは、各企画で差はあるものの概ね達成することができた。

にこティー教室では例年の学習支援や、長期休暇中の宿題支援に加え、連携する他団体の数が9団体、参加する子どもたちが増加するなど、外部や新しい子どもたちとの繋がりを新しく持つことができた。一方で支援者不足が深刻化するといった問題も起こった。これに関しては幹部が中心となって、にこティーメンバーやはだの子ども支援プロジェクト「ゆう」の方と協力し、全体ミーティングでにこティー教室を取り上げたり、他企画のメンバーに呼びかけたりするなどの対策を行った。

異文化理解ワークショップでは３月に開催予定のイベントを入れて２回のイベントを実施した。昨年１２月２日に行ったイベントでは体調不良などで当日の欠席者が多く、参加者は少なかったが一人ひとりに丁寧な対応をすることができ、アンケートでも異文化を学んでもらえたことが窺えた。３月に開催予定のイベントでは今まで固定化されていたイベント形式を大きく変え、さらに子どもたちに楽しく異文化を学んでもらえるように新しい試みを考えている。

シンポジウムでは「TICC勉強会」と題し、６月に東京ジャーミィ・トルコ文化センターに行きモスクの見学を通してイスラム教やトルコ文化について学んだ。また、１月には「国際結婚」をテーマに実際に国際結婚をした東海大学の先生などにインタビューで国際結婚のメリット・デメリットについて考え、賛成派反対派に分かれてディベートを行った。

FSCではスポーツや食事を通して国際交流をしてもらうSports FestaやCommunication Lunchに加え、日本文化に触れてもらう鎌倉旅行や餅つき大会を行った。いずれも参加者の満足度は高かったが、参加者数の減少や参加していただいた留学生と日本人学生の数に偏りが生じてしまう等の反省点もあった。この点については広報の見直しだけでなく、イベントの内容も改善していきたい。

学びのテーマについては、年に３回行う振り返りシートで学びのテーマにチーム・個人で取り組めたかという問いでいずれも３回目が最も高い平均点になり、メンバーが年間の活動を通して学びのテーマを意識し、集い力を身につける事が出来たことが分かる。年間の数多くのイベントの中で特に夏季休暇中の９月に山中湖のセミナーハウスで行った研修旅行が集い力の習得の１つの要因であると考える。２泊３日という長い時間を共に過ごしミーティングやレクリエーションを行うなかで、普段話す機会が少ない学年との交流や、新しく入ってきた１年生同士の仲を深めることができた。これにより信頼関係が生まれ、それ以降の活動を連携・協力して取り組めた。

1年間を通し活動する中で、メンバー間で連携・協力するにはお互いを信頼し合うことが重要であると学んだ。これらの反省を生かして来年度はさらによりよい活動ができるよう精進していきたい。

❸ 年間スケジュール

月	企　画	概　要
5	にこティー教室（通年）	秦野市に住む小・中学生を対象に、学校の宿題に取り組んだり遊びをしたりして、日本語や学校生活に慣れる手助けをする。はだの子ども支援プロジェクト「ゆう」の方にご協力いただき、毎週水・木曜日に活動している。
	Communication Lunch（通年）	東海大学に通う留学生と日本人学生の交流を目的に、毎週火曜日にランチを通して交流を深めてもらうイベントを行った。持ち寄るご飯にもそれぞれの文化が窺え、話題の種になり活発な交流をすることができた。
	TICC Sports Festa	猛獣狩り・しっぽ取り・障害物リレー・水風船合戦を行い、日本人学生と留学生の直接的な交流をするイベントを行った。初めての試みだった水風船も、参加者の方達に楽しんでいただけた。
6	TICC 初夏の勉強会 2018第2回 モスクを巡る、多文化共生の旅	TICCメンバーの多文化共生への関心を深めることを目的に、代々木上原にある東京ジャーミィ・トルコ文化センターを訪問し、イスラム教に文化や慣習に触れてもらうイベントを行った。
7	TICC　ぶらり旅 ～鎌倉編～	TICCメンバーと日本人学生、留学生で鎌倉に行き、観光名所を訪れたり、日本食を楽しんでもらうイベントを行った。実際に足を運んで旅をすることにより、五感で日本文化に触れてもらうことができた。
8	翰林日本語学院訪問	横浜市青葉区にある翰林日本語学院に訪れ、語学学校に通う学生さんたちと一緒にゲームや白玉作りを通して交流を深めた。
10	TICC Sports Festa	整列ゲーム・新聞なげ合戦・円陣バレー・二人組リレーなどを行い、留学生と日本人学生が交流を行うことを目的とした。種目に工夫をこらし、参加者に楽しんでもらえるような企画にした。
11	秦野市立大根中学校 異文化理解授業	秦野市社会福祉協議会の方からの依頼を受け、秦野市立大根中学校にて異文化理解授業を行った。様々な海外の文化の紹介や、多文化共生についての説明を行い異文化理解を深めてもらうことを目的とした。
12	第8回 世界の国々をのぞいてみよう ～韓国～	秦野市の小学校に通う小学生とその保護者を対象に、前回要望が多かった「韓国」をテーマに取り上げ、韓国の文化や慣習の紹介や、ゲームなどを通して異文化を楽しんでもらうイベントを行った。
1	TICC 新春もちつき大会	留学生に「餅つき」を体験してもらうことで、日本文化への関心を深めてもらうとともに、日本人学生との交流を目的にイベントを行った。味付けや開催場所を工夫し、多くの方に参加していただくことができた。
3	ヨーロッパを知ろう！ ～イギリス・フランス・ドイツってどんな国？～	秦野市に住む小学生とその保護者を対象に、世界の文化を知ってもらうために世界各国の地理や挨拶、食生活、習慣などを紹介する。今回のイベントでは、ヨーロッパの３か国を取り上げ、その紹介を行う。

❹ 協力団体

はだの子ども支援プロジェクト「ゆう」、翰林日本語学院、東京ジャーミィ・トルコ文化センター、秦野市立南公民館、秦野市教育委員会

❺ メディア掲載・放映

特になし

3.11生活復興支援プロジェクト

湘　南

達成目標　次の復興段階を見据えて、地域の方々と学生が共同で活動する

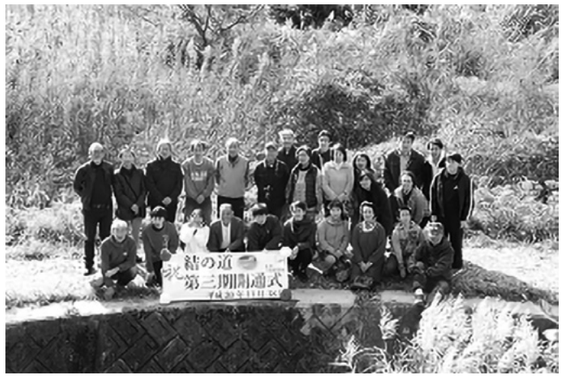
学びのテーマ　組織の一員として、自分のできることを考え、活かし方を学ぶ

リーダー	須藤和基	工学部建築学科	2年
サブリーダー	小川貴大	工学部建築学科	3年
サブリーダー	加藤悠人	工学部建築学科	2年
広報リーダー	武田和樹	工学部建築学科	3年
会計	川島功	工学部土木学科	2年
コーディネーター	小澤伸将	チャレンジセンター	
アドバイザー	杉本洋文	工学部建築学科	
	堀本麻由子	現代教養センター	
	浅井亜希	文化社会学部北欧学科	

（参加人数45名）

❶ 活動概要

本プロジェクトは「持続可能な開発のための復興支援」を活動理念に掲げ、資源循環、伝統文化、風土等の地域資産を尊重・活用しながら、地域の方々が自発的な復興を行ってもらうためのサポートをしている。また、震災から8年が経過し記憶が薄れつつある今、地域の方々の実体験や当時の様子、本プロジェクトの活動内容、復興状況を伝える活動を「風化防止活動」として大学周辺地域や活動拠点で行っている。



❷ 一年間の達成目標と学びのテーマに対してどのような活動を行い、どのような学びがあったか

相川地区・小指地区では、8月に“世代間交流”、“地域の恒例行事化”を目的として「小指大縁日～子どもから大人まで輪になろう～」を開催した。昨年度完成した小指観音堂のウッドデッキを利用し、ヨーヨー釣りや輪投げといった屋台を出し親子で参加していただいた。そのため、“世代間交流”ができる場となり目的を達成し、地域の方が楽しく参加できる企画を立てることで地域交流が発生することを学んだ。「小指大縁日」の“地域の恒例行事化”としては、今後も定期的に開催することが可能であるが、復興途中であるため、本プロジェクトから企画を提案する必要があることが分った。また、2月には「春祈祷」という地域のお祭りと同日開催で「思い出を残そう」という企画を行った。“小指観音堂を情報館として活用する”を目的に石巻市立大川小学校といった被災地の説明や住民の方が写っている写真をアルバムにしたり、地区と本プロジェクトの歴史を記した年表の設置を行った。この企画を通して本プロジェクトが過去にどのような活動をしてきたかを学ぶことができた。

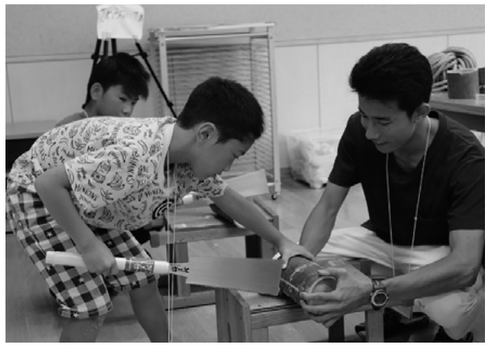
泊地区では、8月上旬に大船渡市立越喜来小学校の児童を対象として、「夏のこども教室～竹を使ってつくろう！あそぼう！～」を開催した。“地元への愛着度向上”を目的に、地元の竹を使った工作教室を実施し、初めて地元の越喜来小学校で開催した。開催場所を泊地区から越喜来小学校に変えたことで泊地区以外の方も企画に参加することができた。このことから、開催場所の重要性を学んだ。そして、8月下旬から9月上旬にかけて「結の道」の整備を行った。「結の道」は一昨年から“高台移転により分断された居住エリアを結ぶ”、“津波跡地の利用”、“津波到達ラインの可視化”、“避難経路の確保”、“震災の継承”を目的に整備を始めた。今年度は、第一区間を整備したことで全五区間開通させることができた。作業中に地域の方から多くの声をかけていただいたり、作業を手伝っていただき予定より早く作業を終わらせることができた。3年間継続して整備し、地域の方と共同で取り組んできたことで、継続して活動を行う大切さを学んだ。

広報活動として10月に大船渡市で開催された「産業まつり」に参加した。“大船渡市にて活動の周知”、“市民と交流”を目的に初めて被災地で活動紹介をした。本プロジェクトのことを認知している方や、過去に本プロジェクトと関わりのある方等多くの方に訪問していただき、復興支援活動の継続の大切さを学んだ。11月には平塚市で開催された「大門市」に参加した。“魅力発信”として小指地区の住民の方から仕入れた海産物を販売する東北物産展を実施し、本プロジェクトの活動紹介を行った。物産展と活動紹介の両立は難しく、魅力発信と活動紹介の両立の難しさを学ぶことができた。

様々な企画をきっかけとして、個人個人が自分の役割を考えられるような場を設けるようにしたが、そのような場を設けることができないこともあったため、役割を考えきれないメンバーもいた。また達成目標に関しては、現在ある課題を考え地域の方々と共同で活動することができたが、次の復興段階は協議する必要があると考えられる。

❸ 年間スケジュール

月	企　画	概　要
6	いぬねこLOVE ミーティング in東海大学前	近隣住民を対象に湘南犬猫協議会が開催した「いぬねこLOVEミーティングｉｎ東海大学前」に参加した。地域住民の方に活動内容や東北の現状を知ってもらうことを目的に、活動紹介パネルの展示などを行った。
8	夏のこども教室	大船渡市立越喜来小学校の児童を対象に、地元への愛着度向上や、小学校での思い出作り、子どもたちのコミュニティ形成を目的として開催した。企画内で、竹の水鉄砲と竹ボックリの製作を行った。
	平塚総合防災訓練	平塚市民を対象に平塚市が開催した「平成30年度平塚市総合防災訓練」に出展した。震災当時と現在の東北の風景やプロジェクトの活動内容がわかる写真の展示、リーフレットなどの活動紹介資料の配布を行った。
	小指大縁日	小指地区の方々を対象に「小指大縁日～子どもから大人まで輪になろう～」を開催した。幅広い世代に楽しんでもらえるよう、ヨーヨー釣りやかき氷、輪投げの屋台を出したり、自作のピザ窯を使用してピザを作った。
	結の道整備	結の道第一区間の整備を行った。今回整備した場所は、車の通行があるのでウッドチップは敷かず、砂利のみを敷いた遊歩道となった。10名ほどのプロジェクトメンバーで作業を行った。
10	復興！第38回 大船渡市産業まつり	大船渡市民を対象に行われた「復興！第38回大船渡市産業まつり」に出展した。プロジェクトの活動内容が分かる写真や活動紹介パネルの展示、リーフレットやどんぐりハウスのペーパークラフトなど活動紹介資料の配布を行った。
11	結の道第三期開通式	泊地区住民を対象に「結の道第三期開通式」を開催した。参加者全員でテープカットを行った後、結の道を一緒に歩きながら今後のことについて話し合った。
	大門市	平塚市の大門会主催の「第8回大門市」に参加した。パネルやリーフレットを使用した活動紹介や小指地区の住民から仕入れたわかめ、昆布、とろろ昆布、あぶり鰯の販売を行った。
12	社会貢献学会参加	社会貢献学会員を対象に社会貢献学会と東北福祉大学が開催した「社会貢献学会第9回大会」に参加した。学生ボランティア交流パネルディスカッションやポスターセッションに参加した。
2	思い出を残そう	相川地区・小指地区を対象に「思い出を残そう」を開催した。小指観音堂を情報館として活用していただけるようにアルバムの作成や、地区と本プロジェクトの歴史を記した年表の設置を行った。



❹ 協力団体

大船渡市立越喜来小学校、大船渡市農林水産部農林課、特定非営利活動法人アーバンデザイン研究体、片山和一良、今野節夫、泊部落会、下田奈祐、小指契約会、平塚大門会、湘南犬猫協議会、平塚市災害対策課、社会貢献学会、東北福祉大学、平塚市ひらつな祭実行委員会、災害から明日を守る会

❺ メディア掲載・放映

8/15 東海新報（新聞）、8/23 東海新報（新聞）、8/28 東海新報（新聞）、8/29 東海新報（新聞）、10/12 ちえんVol6（情報誌）、11/15 東海新報（新聞）、11/19 東海新報（新聞）、12/1 東海新報（新聞）

DAN DAN DANCE & SPORTS プロジェクト

湘　南

達成目標　「する（踊る）」「観る」「支える」の人たちが集い1000人以上が関わった公演を創り上げる

学びのテーマ　見通しを持って仕事をする能力を学ぶ

リーダー	林瑞葵	教養学部人間環境学科社会環境課程	3年
サブリーダー	宇張前恵	工学部建築学科	4年
サブリーダー	多田菜奈美	文学部広報メディア学科	2年
広報リーダー	武田美咲	文学部文明学科	2年
会計	小林大地	工学部電子電気工学科	2年
コーディネーター	三橋雅之	入学課	
アドバイザー	中村なおみ	体育学部体育学科	
	田巻以津香	体育学部生涯スポーツ学科	

（参加人数３３名）

❶ 活動概要

ダンスなどの身体表現の魅力、素晴らしさを多くの人に伝えることで、地域や社会に貢献することを目指して活動している。そのために、「する（踊る）」「観る」「支える」仲間1000人以上が関わる公演を創り上げることを目標にしている。社会への貢献や目標の達成を行うには、地域や学内の様々な団体、人々と連携することが必要である。そのため、年間を通して様々な身体表現ワークショップの開催や、パフォーマンス披露などを行い、人との繋がりや、自身の能力を高めたうえで、DAN DAN DANCE & SPORTS公演を開催する。

❷ 一年間の達成目標と学びのテーマに対してどのような活動を行い、どのような学びがあったか

大きく分けて５つの活動を通して、学びのテーマである「見通しを持って仕事をする能力を学ぶ」ことを目指した。

まず、4月は第77回日本医学放射線学会総会にてダンス作品を披露し、春の交流会では主に新入生を対象に身体表現による交流の場を設けた。これらのイベントは、プロジェクトが新体制になってすぐに行った活動であり、自分たちがプロジェクトを創る難しさを経験した。特に活動を行う上で多くの準備が必要であることを学んだ。第77回日本医学放射線学会総会でのパフォーマンスは、元々あった振付・構成を生かしつつ、より良く魅せる工夫を行った。当日はタイムスケジュール管理や、用具の準備がうまくいかず、事前に何にどれだけの時間が必要か、そのために準備しなければいけないものは何かを考える必要があることを学んだ。春の交流会では、他プロジェクトと合同で開催したことで、共に1つの目標に向かって努力することの楽しさや、参加者に楽しんでもらうための工夫など「支える」能力の学びが多くあった。

6月にはC.A.P.主催の音食WEEKにてパフォーマンスを披露した。観客の方にも、「観る」だけでなく「する（踊る）」ことの楽しさを体感してもらえることを目指した。当日は、観ている人も一緒に踊れる振付を考え、踊ることで、幅広い年齢の方に笑顔で参加していただけた。しかし、本番までのスケジュールに余裕がなく、「観る」楽しさを伝えるために重要であるパフォーマンスの完成度を高めることができなかった。練習日程においても見通しを持ち、効率の良い活動・進行方法を検討するべきだと学んだ。

10月には世界で活躍されているダブルダッチパフォーマーの方を講師としてお招きし、ダブルダッチワークショップを開催した。このワークショップは身体表現の幅広さ、「する（踊る）」ことの楽しさを感じてもらうとともに、外部団体との繋がりを作ることを目的に企画した。講師の指導の素晴らしさもあって満足度の高い充実した活動になった。しかしメンバー内での情報共有不足、各々のシュミレーション不足により当日スムーズな準備を行うことができず、多くの方に迷惑をかけてしまった。この失敗が、「見通しを持つ」ということの重要性を改めて学ぶ機会になった。

プロジェクト最大のイベントであるDAN DAN DANCE & SPORTS第8回公演は、「ともに」を公演テーマに12月に開催した。チラシを予定通り完成させることができず、広報活動が疎かになってしまったこと、出演団体へのオファーが余裕を持ってできなかったことなど、企画段階では見通しを持った仕事ができなかった。しかし各活動の反省を生かし、メンバー全員が前日・当日の作業に見通しを持てたことで公演の会場準備・運営はスムーズに行うことができた。結果的には「する（踊る）」「観る」「支える」の人たちが集い1000人以上が関わった公演を創り上げるという目標は未達成となってしまったが、外部スタッフや出演者から楽しかったという声をいただけたことから、ダンスなどの身体表現の素晴らしさを多くの人に伝え、共有することができた。

❸ 年間スケジュール

月	企　画	概　要
4	第77回日本医学放射線学会総会	昨年度Tokyo2020学園祭でベストパフォーマンス賞を受賞した作品を披露。日本の和をテーマとしたパフォーマンスを行い、多くの外国の方にも楽しんでいただけた。
	春の交流会	在学生に向けて、実際に身体表現を行う体験型の企画を通して、プロジェクト理解や身体表現の楽しさを広めることを目的に行った活動。スポーツ社会貢献プロジェクトと合同で行い、新たな運営技術を学んだ。
6	音食WEEK	自分たちで創作したパフォーマンスを披露。「観客に観るだけでなく「する（踊る）」楽しさも伝えたい」という思いから、一緒に踊れる工夫を取り入れた。
8	8号館ディスプレイ展示	8号館バブショップ前のスペースにて展示を行った。ポスター、DAN DAN DANCE&SPORTS公演の映像、写真パネルを使用し、活動の理解やプロジェクトの雰囲気が伝わるよう努めた。
10	ダブルダッチワークショップ	身体表現の幅広さ、「する」楽しさを広めるために企画。外部講師を依頼し、次回の開催を望まれるくらいの充実したイベントを目指した。また、イベントの運営を通して、「支える」スキルを学んだ。
11	建学祭	写真やポスターを展示し、それに沿って直接活動目的や内容を説明した。展示に加え、パフォーマンス動画を作成し流すことで、実際の公演の雰囲気や、身体表現の幅広さを感じてもらえる工夫をした。
12	DAN DAN DANCE & SPORTS第８回公演	年齢やジャンルを超えた様々な身体表現パフォーマンスの公演。地域で活動するダンス・一輪車競技等のパフォーマンス団体や、プロの舞台製作業者、観客とともに舞台を創り上げ、年間達成目標を果たすことを目指した。

❹ 協力団体

有限会社OVER THUMPZ、株式会社クリエイティブ・アート・スィンク、舞台監督 藤森遥菜、照明アシスタント 守屋千里、照明アシスタント 浜田智愛貴、第二映像企画、特定非営利活動法人 Dance Association Seeds、studio RISPEC DANCE SCHOOL、cLOWN number、無名、チアフルRG、CHAPPY、Full House、一輪車パフォーマー MONA、Kiyo jazz dance spot、Jewel Dance Studio、東海大学望星会舞台屋、東海大学文化部連合会放送研究部、東海大学体育学部体育学科中村なおみゼミナール

❺ メディア掲載・放映

12/7 タウンニュース秦野版（情報誌）、タウンニュース秦野版（WEB）

Beijo Me Liga

湘　南

達成目標　地域の方に在日外国人の方と交流する場を設ける

学びのテーマ　異文化理解の魅力を地域へ発信し、多文化共生を学ぶ

リーダー	山中大輝	工学部建築学科	2年
サブリーダー	谷田杏佳	教養学部国際学科	2年
サブリーダー	和知郁実	教養学部国際学科	2年
広報リーダー	岡野佑亮	経済学部経済学科	2年
会計	山上華奈	教養学部国際学科	3年
コーディネーター	松本理奈	情報システム課	
アドバイザー	小貫大輔	教養学部国際学科	

（参加人数93名）

❶ 活動概要

私達は、外国に繋がる子どもたちが日本の社会と出会う機会を持てるように活動している。彼らは言語や文化の問題もあって生活に馴染めていないのが現状であり、地域との温かい出会いを必要としている。しかし、彼ら自身がいきなり地域の人々と触れ合いの場を作ることは容易ではない。私達が協力することで、そのような場が可能となるのだ。単に架け橋となるだけでなく、参加する人たちが互いに触れ合い楽しめることを大切にし、私達も外国の文化を学び、多様なものの捉え方を身につけようとしている。

❷ 一年間の達成目標と学びのテーマに対してどのような活動を行い、どのような学びがあったか

今年度は台風の影響で夏のマルチカルチャーキャンプを開催することができなかった。この悔しさをバネにして、冬にはより一層力を入れて素晴らしいマルチカルチャーキャンプを開催することができた。

冬のマルチカルチャーキャンプには、ブラジルや韓国、アメリカにルーツを持つ子どもたちや大学生が集まった。季節に合わせ節分を参加者と体験したり、運動会で騎馬戦をしたり、様々な形で日本の文化を楽しんでもらうことができた。他のアクティビティでは母国のダンスを全員で踊ったり、空いている時間を使って相手の言語文化に触れたりするなど、様々な異文化交流ができた。このキャンプを通して相手の文化に関心を持ち、お互いの文化を理解し合う場をつくることができたと思う。

海外にルーツを持った子どもたちにたくさん参加してもらうために、今年度は多くの新しい外国人コミュニティや学校を訪問し、親睦を深めた。在日ブラジル領事館が企画したブラジル学校に通う子どもたちのための大学説明会でブースを開き、外国人コミュニティや学校との繋がりを増やしたり、秦野市に住んでいるブラジル人やペルー人が通う団体を訪問してみたり、積極的にイベントに参加し、新しい繋がりを増やした。夏のマルチカルチャーキャンプでは順調に準備を進めることができず、本番の前日まで慌しかったが、この反省を活かして事前に細かいスケジュールや担当者を決め、順調に準備や当日の流れの確認をすることができたと思う。

外国人コミュニティや学校との関わり中で、彼らの抱えている問題を知ることができた。例えば、日本語が中心になった子どもたちと日本語のできない親との間に言語の壁が生じていることや、外国に繋がりを持っていることが学校生活を送るうえでのハンディキャップになっていることである。このような問題を抱えた子どもたちは自身のアイデンティティを確立することが困難になっている。そのような子どもたちが自分らしく過ごせるような機会をつくることは大切だ。彼らが、自分の周りに多様な人がいることを知り、自分に自信を持てるように私達は活動を通して彼らと関わりたい。Beijo Me Ligaの活動が良いきっかけづくりになってほしいと考えている。

そういった自分達の活動のほかにも、神奈川県内のみならず積極的に大阪や群馬など日本各地の外国人コミュニティを回って交流を深めた。どこに行っても、大歓迎をしてもらい、いかに外国にルーツのある人たちが日本人の大学生との交流を深めることを望んでいるかが実感できた。来年度も、そういった努力を続けていきたいと思う。

❸ 年間スケジュール

月	企　画	概　要
4	イースター	厚木市ブラジル学校の子どもたちと交流を深めるためにEaster（キリスト復活祭）の企画に参加し、参加者全員で楽しもうとすることでより深くお互いに理解し合った。
5	愛川フェスタジュニーナ	ブラジル文化を体験した。またこのイベントを通して国籍にとらわれない多様な価値観を共有し、お互いの文化の良さを実感した。さらに参加者とのコミュニケーションをとることで、彼らとの親睦を深めた。
6	大阪フェスタジュニーナ	このイベントを企画した団体と初めての交流であったため、多くの人と交流して親睦を深めた。またイベントの準備から参加し、ブラジル文化を共に楽しんだ。
7	日伯学園 フェスタジュニーナ	前日の準備から参加し、日伯学園の学生や先生とコミュニケーションをとりながら、ブラジル文化を共に楽しんだ。また学生の両親などが当日はお手伝いにくるため、コミュニケーションをとり信頼関係を高めた。
8	マルチカルチャー キャンプ（夏）	台風の影響で開催することができなかった。
10	国際フェア	ブラジルブースを担当し、学生や地域の方々を対象に文化を紹介できた。写真やサンバの衣装を展示し、よりブラジルの素晴らしさを伝えることができた。
11	建学祭	メンバーで仕込みから始め、ブラジルで多くの人が食べているお肉（シュハスコ）を提供することができた。
12	国際フェスタ	厚木市にある菅原小学校で開催された国際フェスタに参加した。様々な国から来た子どもたちが多くいて、子どもたちに日本の遊びを楽しんでもらうことができた。
2	マルチカルチャー キャンプ（冬）	日本の文化をテーマとして、節分や運動会をした。また初めて招待する人が多かったが、最終日には別れを惜しむほど素晴らしい関係を築くことができた。

❹ 協力団体

ビオダンサ（内田佳子/小貫早苗）、（以下、すべてブラジル学校）Instituto Educacional TS Recreacao、日伯学園、Escola Opcao、ARTEL、Himawari Gakushu International School、アレグリアデサベール豊橋校、Escola Sao Paulo

❺ メディア掲載・放映

特になし

熊本復興支援プロジェクト

湘　南

達成目標
①各長期休暇に被災地での活動を通して被災地の人々とのつながりを強め、継続的な復興支援を行っていく関係を作る。
②企画を通して地域の方々に防災意識を高めてもらい、熊本地震に関心を深めてもらう。

学びのテーマ
被災地と湘南での活動を通して企画を作り、実行する力、成し遂げる力を学ぶ。

リーダー	中川蘭夢	理学部数学科	3年
サブリーダー	石井寛紀	教養学部人間環境学科自然環境課程	3年
サブリーダー	矢萩貴美子	理学部数学科	3年
サブリーダー	陌間拓未	工学部精密工学科	2年
広報リーダー	矢萩貴美子	理学部数学科	3年
会計	中山一冴	工学部電気電子工学科	3年
コーディネーター	高橋操	チャレンジセンター	
アドバイザー	ニノ宮リムさち	現代教養センター	
	梶田佳孝	工学部土木工学科	

（参加人数30名）

❶ 活動概要

被災地の現状を把握するために9月2日から9月6日にかけて熊本での活動を行った。

また、熊本での活動で学んだ被災地の現状や熊本地震での出来事を湘南校舎周辺地域における防災意識の向上や風化防止に生かした。

年間を通じ、周辺の中学生十数名を対象とした防災教室を定期的に行った。年度末には、一年間の防災教育活動の集大成として、大根中学校の2年生の授業を一時間お借りして、防災教室を行った。

❷ 一年間の達成目標と学びのテーマに対してどのような活動を行い、どのような学びがあったか

今年度の達成目標および学びのテーマを踏まえ、熊本地震の被災地支援と中学生を対象とした防災教育に取り組んだ。

熊本での活動は、9月2～6日に、被災地において熊本地震発生からの復興状況や、現在の取り組みについての情報収集を目的に、最大震度を記録した益城町東無田地区の農家への訪問、本学熊本キャンパスのチャレンジプロジェクトの参加学生との交流、熊本県内最大の仮設住宅であるテクノ仮設団地の住民とのレクリエーションなどを行った。東無田地区での活動では、地区住民らが復興委員会を組織して、イベントの誘致や震災の語り部活動を積極的に行っていることを知り、被災地の人々が自分たちの手で復興しようとしていることを学んだ。被災地に立地する熊本キャンパスでのチャレンジプロジェクトの学生との交流では、互いのプロジェクトが実施する復興活動についてディスカッションを行った。テクノ仮設団地では、住民たちの談話室に集まってもらいカラオケ大会を開催するなど、住民同士の交流する機会を企画した。

また、湘南キャンパス近隣の大根中学校の生徒１０名程度を対象にESD塾防災教育ミニプログラムを年間を通じて行った。この活動は、毎週水曜日に湘南キャンパスで行われている、中学生の認知・非認知能力の向上を目的とした場であるESD塾において、教科学習支援と併行して防災教育を実施したものである。参加型学習を通じた非認知能力の育成と、災害時、地域を担う要となる中学生としての防災意識、対応力の育成を目的とした。プロジェクトメンバーが班に分かれ、ローテーションで、避難方法や身近な道具の活用法などに関する参加・体験型の授業を行った。災害に備え持ち歩くべき道具を選ぶ防災ポーチ作りゲームや、災害をモンスターに見立て選択肢の中から対処方法を考えるRPG風のクイズ、災害時に出回るネット上のデマの見分け方を考えるプログラムなどの授業を行った。さらに、2019年1月１８日には、秦野市立大根中学校の２年生全生徒１１５名を対象に、限られた物を工夫して使い対処する柔軟性や応用力、他と協力して乗り越える協働力を育む５０分間の防災授業を実施した。中学生に授業に関心を持ってもらいより記憶に残りやすい防災教育を行えるよう、クイズや実演を取り入れ授業の進行を工夫した。結果として中学生からは、普段の授業とは異なりゲームに参加しているようで楽しかった、防災について改めて考える機会になったなどの声をいただいた。また、各班がプログラムで扱う内容について深く調べることを通じ、メンバーの防災についての知識の向上にも繋がった。

反省点としては、プロジェクトミーティングを定期的に行わなかったために、メンバー同士の深い繋がりが生まれず、メンバーが満足感を持って活動に参加することが出来なかったことが挙げられる。プロジェクトなど、人と協力し合わなければならない活動では、メンバー同士の深い繋がりが必要であり、それを作るためには互いに顔を合わせ、本音を言い合う事が大切であることを学んだ。

❸ 年間スケジュール

月	企　画	概　要
5	ESD塾 防災ミニプログラム （防災○×ゲーム）	ESD塾に参加している中学生１０名程度を対象に、○×クイズ方式で、災害が起きた時に取るべき行動をについてミニ授業を行った。
6	ESD塾 防災ミニプログラム （防災間違い探し）	様々な部屋の絵を題材に、家具などが災害時にどのような理由で危険物となってしまうのかを考え、より防災を意識した環境づくりについて考えるミニ授業を行った。
	ESD塾 防災ミニプログラム （防災ポーチ）	身のまわりにあるものを題材に災害時に何が必要になるか、なぜそれが必要なのか話し合うミニ授業を行った。
7	ESD塾 防災ミニプログラム （身近なもので考える防災）	防災時に自分たちを取り巻く環境がどのような状況に変化を生じるかを説明し、身近な物でも防災工作出来る事を伝えた。
	2018年度 夏の現地活動説明会	被災地でのボランティア活動を行う一般社団法人RQ災害教育センターの八木和美氏を講師に招き、被災地での活動意義やその現状などを学んだ。
9	2018年度夏の現地活動	被災地において復興の現状や被災者の生活環境を学び、熊本キャンパスの被災した学生との意見交換に行った。また被災後の農家の実情を学ぶため援農作業を行った。
10	中間報告会	ポスターと写真を展示し、メンバーが被災地の活動で学んだことを伝え、来場者に被災地の現状を視覚的に理解しもらった。
11	ESD塾 防災ミニプログラム （防災かるた）	身のまわりにある物を用いて、災害時に起こりうる問題をどのように解決するかを考える授業を行った。
12	ESD塾 防災ミニプログラム （RPGクイズ）	授業にRPGの冒険要素を取り入れた教材を作成し、中学生に当事者意識を持って、災害時に起こりうることにどのように行動すべきかを考えてもらった。
1	ESD塾 防災ミニプログラム （デマを見つけよう）	SNSで実際に投稿された情報をもとに、災害時のメディアリテラシーの重要性を身につけてもらうことを目的に、中学生は当事者意識を持って積極的に話し合い、その重要性について理解してもらう機会になった。
	大根中学校 本プログラム	熊本地震で実際に起こった被災状況を元に、身のまわりにあるものをどのように使えば身を守れるか考えてもらった。また、熊本地震の復興について説明を行い中学生が災害時には地域の力になれることについて理解を促した。

❹ 協力団体

一般社団法人RQ災害教育センター事務局長八木和美、テクノ仮設団地、益城町農家宮崎誠、秦野市立大根中学校、キャンナス熊本、チャレンジセンターユニークプロジェクト阿蘇復興への道、阿蘇の灯、チャレンジプロジェクト阿蘇援農コミュニティープロジェクト

❺ メディア掲載・放映

1/25 タウンニュース秦野版（情報誌・WEB）

Tokai Dream Space Team

湘　南

達成目標　企業と連携し、中学生、高校生、大学生、社会人が参加するものつくりイベントを企画・実施し、成功させる

学びのテーマ　ものつくり、チームビルディング／チームワークプロジェクトマネジメント、S&MA（Safty and Mission Assurance）

リーダー	牧遼平	工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻	3年
サブリーダー	小島佑太	工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻	4年
広報リーダー	齋藤桃花	工学部応用科学科	3年
会計	大元菜摘	情報理工学部コンピュータ応用工学科	2年
コーディネーター	喜友名浩史	企画広報課	
アドバイザー	岡田工	現代教養センター	
	白澤秀剛	情報教育センター	

（参加人数53名）

❶ 活動概要

現在の社会では、新たな物事に挑戦し、確実な成功に結びつける人材が広く求められている。そこで我々は、小学生から社会人までの幅広い世代を対象にした「ものつくり」イベントを企画・開催する。「プロジェクトマネジメント」「S&MA」という観点から、イベントの参加者にものつくりを楽しみながら、成長を実感していただけるような企画・運営を行う。

❷ 一年間の達成目標と学びのテーマに対してどのような活動を行い、どのような学びがあったか

9月から11月にかけて、TDST主催のものつくりイベント「Intelligent Water Rocket Competition 2018（通称：IWRC2018）」を実施した。このイベントは中学生～社会人を対象にしており、全12チーム計43名の方々にご参加いただいた。IWRC2018は、参加チームが独自に設定したミッションを、ペットボトルロケットの打ち上げを通じで実施していただき、開発プロセスや当日の打ち上げ工程、ミッション達成度を総合して評価を行うコンペティション形式のイベントである。参加者の開発にはマイクロコンピュータを使っていただき、電子工作やプログラミングなど、日常では中々触れることのない分野に挑戦していただいた。当イベントにおいて、TDSTがイベント企画・立案、運営を行い、協賛企業が競技における採点基準の作成/当日の採点、開発備品の提供、ペットボトルロケット発射台の共同開発などを担当した。IWRC2018の活動はイベント企画・立案から打ち上げ当日まで約7ヶ月間の期間を要する。長期的な活動を行う上で必要なタスクや所要時間を見積もり、計画を立てながら運営できた。また、立てた計画を元に地道にタスクをこなして行くことができた。このことから、「プロジェクトマネジメント」の学びを実現できたと言える。また、イベントを通して「怪我人の出ないこと」を徹底した運営を行った。参加者に安全な開発を行ってもらえるよう開発の安全に関わる内容をまとめたマニュアルを作成・配布を行い、危機管理意識を持っていただけるような取り組みを行ったほか、台風に伴ったイベント中止・代替措置への移行判断を事前に行うことができた。このことから、「S&MA（Safty and Mission Assurance）」の学びを実現することができたと言える。また、本活動を通して、「企業と連携し、中学生、高校生、大学生、社会人が参加するものつくりイベントを企画・実施し、成功させる」という目標を達成することができた。

8月3日に行われた、サイエンスコミュニケーター主催「世界一行きたい科学広場」において、「わくわく宇宙探検」という名称で地域の小・中学生へ向けた展示活動を行った。惑星探査をモチーフとした体験型のブースを用意し、宇宙での活動の仕組みや難しさ、面白さを体験を通して体感してもらうことができた。子供たちは宇宙開発に非常に強い興味を持っており、熱意を持って説明、体験を提供できた。イベント当日は、ブースの管理役や説明役などの配置したり、シフトを組んで時間管理を行った。これによって、適切な人員配置や時間管理が徹底できるようになった。よって、当イベントでは「チームビルディング／チームワーク」「プロジェクトマネジメント」の学びを実現することができた。

プロジェクト内では今年度よりメンバーの技術力・マネジメント力向上を目的に、実践的ものつくり技術トレーニングプログラム（通称：PETプログラム）を実施した。本プログラムでは、新入生で数チームを編成し、チーム毎にミッション設定・開発・ペットボトルロケットの打ち上げを年３回実施し、チームの目標達成に必要な電子工作、プログラミング、データ解析、S&MA、マネジメントの技術を活動を通じて身につけてもらう。経験や技術力のある上級生が下級生に指導もあるが、新入生自身が計画を立ててチームでの開発を行った。まだ知らないことを調査したりトライアンドエラーを繰り返す中で技術力を身につけ、コミュニケーションをとりながら自発的にマネジメントを行えるようになった。このことから、「ものつくり」「チームビルディング／チームワーク」「プロジェクトマネジメント」の学びを実現できたと言える。

❸ 年間スケジュール

月	企　画	概　要
6	Intelligent Water RocketCompetition 2018（以下IWRC2018）の参加者募集	ペットボトルロケット打ち上げイベントIWRC2018の勧誘活動の実施。
8	わくわく宇宙探検	サイエンスコミュニケーター主催イベント「世界一行きたい科学広場」での展示活動の実施。小・中学生向けに宇宙探査をテーマとした体験ブースの展示、宇宙開発の説明を行った。
9	IWRC2018 競技説明会	IWRC2018の競技説明、協賛企業様による基調公演、マイクロコンピュータや開発キットなどの配布物の提供。
	IWRC2018 S&MA講習会	有人宇宙システム株式会社様による安全と確実なミッション達成についての講習会の実施。安全に関する講習、開発やミッションにおけるリスクや対策を考える演習の実施。
10	IWRC2018 ものつくり講習会	マイクロコンピュータを用いたペットボトルロケット開発における必要な準備や知識の実演を交えた講習の配信。
11	建学祭	TDSTの紹介、IWRC2018の紹介、IWRC2018参加者への応援メッセージブース、IWRC2018で使用するマイクロコンピュータの展示、ペットボトルロケット打ち上げ動画の上映。
	IWRC2018 競技会	ペットボトルロケット競技大会の実施、表彰。

❹ 協力団体

特定非営利活動法人日本ITイノベーション協会、有人宇宙システム株式会社、株式会社アジャスト、株式会社IHIエアロスペース、シスコシステムズ合同会社、アーム株式会社、ルネサスエレクトロニクス株式会社、株式会社京樽、株式会社映像センター

❺ メディア掲載・放映

11/26 カナロコ（WEB）、11/26 神奈川新聞（新聞）

Takanawa共育プロジェクト

高　輪

達成目標　大学と地域のつながり

概要　地域貢献を通して大学と地域の信頼を深める

リーダー	鈴木充	情報通信学部通信ネットワーク工学科	3年
サブリーダー	斎藤優斗	情報通信学部通信ネットワーク工学科	3年
サブリーダー	半田優子	情報通信学部情報メディア学科	3年
広報リーダー	田中千咲子	情報通信学部情報メディア学科	3年
会計	松本健典	情報通信学部通信ネットワーク工学科	3年
コーディネーター	河村裕文	高輪事務課	
	吉村敬太	高輪数学課	
アドバイザー	崔一煐	高輪教養教育センター	
	田畑智章	情報通信学部経営システム工学科	
	佐藤弘幸	情報通信学部通信ネットワーク工学科	

（参加人数42名）

❶ 活動概要

東海大学（高輪キャンパス）が高輪地区にとって必要な存在として認識してもらえるように、地域の様々なイベントに積極的に参加していく。また、イベントを企画・運営することや定期活動としてテニススクールや地域清掃などの貢献活動をすることで、日常的に地域の方々と交流をはかる。これら活動を通して大学と地域の良好な関係を築き、相互に信頼を深めていくことで「大学と地域の一体化」を目指す。

❷ 一年間の達成目標と学びのテーマに対してどのような活動を行い、どのような学びがあったか

今年度の達成目標は「大学と地域のつながり」であった。これは大学と地域がバラバラに動くのでなく、高輪地区を一緒に協力して盛り上げていこうというものだ。そして、今までに培ってきた繋がりを守っていこうという思いもある。また学びのテーマは、「地域貢献を通して大学と地域の信頼を深める」であり、大学と地域は近い存在でありたいという願いがこもっている。Takanawa共育プロジェクト（TKP）はこれらを念頭に置いて活動を行ってきた。

これらの目標や学びのテーマに対して行った活動を以下にまとめる。定期活動では、月1回地域清掃とテニススクールを行った。地域清掃は高輪警察署の方々と行うもので、今年度はゴミが少なく高輪全体でポイ捨てに対する意識が強くなっていると感じている。テニススクールには、地域のお子さんたちが明るく楽しく参加してくださった。

次に、不定期に行うイベント多くの活動がある。例えば、大学と地域を彩る冬季イルミネーションイベントである。イルミネーションはTKPの発足理由となった活動であり、メンバー全員で作り上げるものである。年ごとにデザインを変え、初めてご覧になった方には感動を、毎年ご覧になっている方にはクリスマスの訪れを、提供できたと思う。キャンパス周辺には神社が多く、担ぎ手が少ない関係から様々な神輿を担がせていただいている。当キャンパスには大学が保管している神輿があり、TKP主催で、建学祭のときに東海大神輿を行っている。今年度は、イベントで知り合った多くの町会の方々が参加してくださり、より一層高輪地区を盛り上げることができた。その他に地域の大小さまざまなイベントの支援を15回以上行った。

広報活動は当プロジェクトのHPとFBを使い行った。どちらもイベント終了から3日以内に更新するようにした。HPをご覧になった方がどんなことをしたかわかるよう、多くの活動写真を掲載した。キャンパス内には掲示板があり、これを1ヶ月ごとに更新している。さらに、先1ヶ月内に行われるイベントの予定を学生の目に留まるように記してきた。

これらの活動から学んだことは、「集い力」の大きさがプロジェクトの強さに比例するということである。上記に挙げた活動は、どれも一人では成すことができない。多くのメンバーが参加してくれたイベントは大成功することが多く、メンバーのモチベーションにもつながっていた。そしてもう一つ、メンバー各々が「自ら考える力」を発揮し討論しながら、より良い企画を創り運営していくことが大切だということだ。TKPの活動の多くは、イベントの参加によるもので自分たちが企画・考案したものが少ないのが現状だ。来年度はTKP主催のイベントを増やし、より地域と大学が密接な関係になり地域貢献につながれば良いと考えている。そのためにもっとメンバー間で話し合う場を設け、「自ら考える力]を培っていこうと思う。

❸ 年間スケジュール

月	企　画	概　要
5	のれんノ市	メリーロード高輪で開催されるお祭り。準備から片付けまで行い、熊本震災復興支援活動として出店も行い、売上金を熊本県共同募金会に寄付した。
7	七タイベント	短冊の作成や笹の準備をTKPで行う。七夕の日には、用意した短冊がなくなるくらい盛況となった。また、期間中に地域の方々と「たなばたコンサート」も行った。
11	東海大神輿	高輪建学祭を盛り上げるため、TKP主催でたかなわ会、高輪神輿同好会、各町会に協力していただき学内に陳列している神輿を担いだ。
12	クリスマス イルミネーション	TKP主催の一大イベント。準備にはシフト制度を投入し、多くのメンバーに参加してもらうことができた。高輪キャンパスと大学周辺が、より明るい地域となった。
1	箱根駅伝応援カフェ	高輪いきいきプラザコミュニティーカフェforyouで行われた応援カフェ。選手を地域の方々と応援しながら、お茶やお菓子の提供。選手が近くに来たときは、沿道に出て目の前で小旗を振り応援した。
3	謎解き宝探し	高輪キャンパスで地域の児童を対象とした謎解き宝探しイベントを実施する。新たな試みとして申し込みフォームを作成した。ポスターやチラシに申し込みフォームへ飛べるQRコードを載せ、人数や学年が把握できるようにした。
	熊本キャンパス訪問	熊本震災復興支援活動の一環として、阿蘇復興への道（ユニークプロジェクト）さんと交流し、2016熊本地震を学び・考える。訪問後は、TKPのHPやFacabookなどで情報を発信し、現状の熊本の様子や離れた場所からでもできるボランティアを伝える。

❹ 協力団体

メリーロード商店街、高輪台商店会、松ヶ丘町会、白金北里商店会、たかなわいきいきプラザ、たかなわ会、
たかなわ神輿同好会、たかなわ子どもカレッジ、高輪中高生プラザ、高輪地区総合支所、警視庁高輪警察署

❺ メディア掲載・放映

通年 プラたかネット（WEB）、5月 J:COM港新宿（TV）、7月 みなとっぷ7月号（情報誌）

先端技術コミュニティACOT

熊　本

達成目標

ＥＴロボコンのチャンピオンシップ大会上位入賞
ＥＴロボコン出場やドローン訓練等で得た先端技術の知識により地域振興に貢献する

学びのテーマ

社会で求められる知識・技術に対する挑み力と社会に対するコミュニケーション力を学ぶ

リーダー	林田悠里	基盤工学部電気電子情報工学科	3年
サブリーダー	玉木智子	基盤工学部電気電子情報工学科	3年
サブリーダー	西口大嗣	基盤工学部電気電子情報工学科	2年
広報リーダー	李皇輝	経営学部経営学科	2年
会計	野島明博	基盤工学部電気電子情報工学科	2年
コーディネーター	福間恵	九州教学課	
	西真奈美	九州教学課	
アドバイザー	中嶋卓雄	情報教育センター	
	村上祐治	基盤工学部電気電子情報工学科	
	松本欣也	盤工学部電気電子情報工学科	
	阿久津雅子	基盤工学部電気電子情報工学科	
	八尋剛規	九州教養教育センター	

（参加人数33名）

❶ 活動概要

「情報系の分野を中心に、社会に出て活用できる技術や知識をメンバー同士で学ぶ」プロジェクト。培った技術や知識を活かし、小・中学校やイベントにおいて地域貢献活動も行っている。主な活動として、ETロボコンへの出場、科学イベントへのブース出展、ドローン空撮、VR開発などを行っている。ETロボコンでは、プログラミング技術だけでなく、モデリング技術の向上も目指しています。一年間の活動を通して、社会的実践力を身につけることを目的としている。

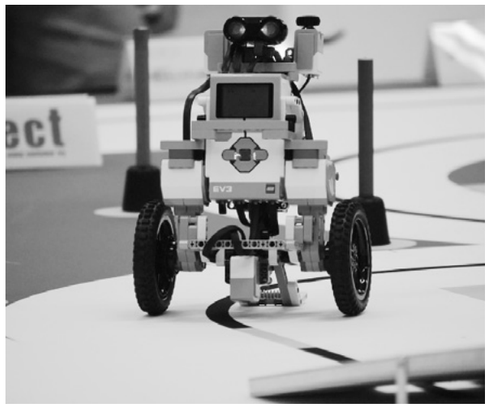
❷ 一年間の達成目標と学びのテーマに対してどのような活動を行い、どのような学びがあったか

達成目標である「ETロボコンのチャンピオンシップ大会上位入賞」については、まず、「ETロボコン九州北地区大会デベロッパー部門プライマリークラス」の総合優勝を目指し開発を行った。「ETロボコン」とは、日本の産業競争力に欠くことのできない重要な「組込みシステム」分野における技術教育をテーマに、決められた走行体で指定コースを自律走行する競技で、同一のハードウェア（LEGO MindstormsTM）に、UML等で分析・設計したソフトウェアを搭載し競うコンテストである。主に夏休みを利用して開発を行い、九州北地区大会総合準優勝を目指した。結果としては、九州北地区大会において「デベロッパー部門プライマリクラス総合準優勝」「Gold Model賞」を受賞し、チャンピオンシップ大会への出場は逃したが、学びのテーマである「社会で求められる知識・技術に対する挑み力」を培うことができた。

もう一つの達成目標である「ETロボコン出場やドローン訓練等で得た先端技術の知識により地域振興に貢献する」については、ETロボコンの開発に取り組む際に学んだプログラミング技術やロボット制御の考え方を用いてNPO法人HITOプロジェクト様と協力し、ロボットプログラミング教室を開催したり、近隣小学校での技術支援を行うなどし、地域貢献活動を行った。また、ドローン訓練で得た技術については、空撮依頼を受け、空撮に出向き撮影した映像を編集し依頼者に提供する活動はもちろん、科学イベントに参加する際には、実際のドローン規制についての説明を行い、啓発活動を行ったうえで、ミニドローンで飛行デモや操縦体験を実施するなど、社会に向けた活動に活かすことができた。これらの活動では、学外の方と打ち合わせを行ったり、参加者の方に活動内容を説明する等、メンバーそれぞれが積極的にコミュニケーションを取ることができ、「社会に対するコミュニケーション力を学ぶ」という学びのテーマを達成できたと考える。さらに、その他の活動として熊本県警・県内他大学と協力しての「サイバー防犯ボランティア」や建学祭で開催した学外向けの「天体観測会」、各種大会の運営スタッフ、主催で開催したもの作りイベントなど、様々な地域向けの活動を行うことで、「ETロボコン出場やドローン訓練等で得た先端技術の知識による地域振興に貢献する」という達成目標を達成し、「社会に対するコミュニケーション力」を培うことができた。特に主催イベントの際には、地域の小学校との打ち合わせや参加者とのやり取りを通じて、学内だけでは経験することのできない、異業種・異世代の方とのコミュニケーションを多く取ることができ、参加者への責任感や主催イベントを開催させていただく上でどういったことが重要なのかを学ぶことができた。

❸ 年間スケジュール

月	企　画	概　要
5	ドローン講習会 #1,#2（5/14、1/15）	ドローン操縦者育成に向け、学内でドローンを操縦する際の規制や注意点などの講習会でコーディネーターの指導を受けた。プロジェクト外からも数名の参加者があった。ACOT内では、月1回の実技訓練を行った。
6	ロボットサマースクール #1～#3 （6/9、6/23、7/14）	NPO法人HITOプロジェクト様主催のロボットプログラミング教室に講師・スタッフとして参加した。モータを回す、タッチセンサを用いて当たったら曲がる、ライントレースをするなどのプログラミングを小学生対象に教えた。
7	台湾高校生向け ロボット教室	台湾から来た高校生13名に対し、ロボットプログラミング教室を開催した。英語での教室運営はACOTとして初であり、苦戦しながらも通訳の方の力を借りながら講師・スタッフを務めた。
8	世界一行きたい 科学広場in熊本	熊本キャンパスで開催された本イベントにてロボットプログラミング・LEGOロボット操縦・スライム作り・ドローン飛行デモの4ブースを担当し、それぞれのブースで来場者に楽しんでもらうための活動を行った。
10	ETロボコン 九州北地区大会	8月から本格的に開発に取り組み、本大会に出場した。結果としては、九州北地区大会デベロッパー部門プライマリークラス総合準優勝・プライマリークラスGoldModel賞受賞となった。
11	天体観測会（建学祭）	今年度が初の開催となった。建学祭に来場した地域の方や学生に惑星や星座を観測してもらうことができた。特に、普段は招くことのできない小学生に天体観測を体験してもらうことができた。
12	あそぼう！まなぼう！ ふれあいフェスタ	熊本地域プロデュースプロジェクトと協力し、益城町立益城中央小学校の児童を対象に合同イベントを開催した。ACOTではロボットプログラミングブースともの作りブースを担当し、小学生に体験を楽しんで貰った。
	冬の思い出を作ろう！ クリスマスイベント	熊本地域プロデュースプロジェクトと共催で、大学近辺小学校の児童を対象にクリスマスにちなんだもの作りを体験して貰うイベントを実施した。ACOTではクリスマスツリー・首振り雪だるま・けん玉づくりのブースを展開した。
	クリスマス イルミネーション	熊本キャンパス内の校舎と木などをイルミネーションし、学生・職員・近隣住民の方に楽しんで貰った。今年度は、一部太陽光発電を利用し、被災時の電源確保のデモンストレーションも行った。
3	夜桜ECOライトアップ	被災時の電源確保のデモンストレーションとして、太陽光発電を利用して夜桜ライトアップを行う。学内にある桜の木を、開花から葉桜になるまでライトアップする。



❹ 協力団体

特定非営利活動法人HITOプロジェクト、熊本県警、熊本市立西原小学校、益城町立益城中央小学校、東海大学付属熊本星翔高校、田舎の体験交流館さんがうら

❺ メディア掲載・放映

6/9 熊本日日新聞（新聞）、10/10 T1Park（Web）、2/1 T1Park Magazine（学生情報誌）

メカトロマイスタープロジェクト

熊　本

達成目標

WORLD GREEN CHALLENGEクラス内優勝
レスキューロボットコンテストにおいて全国大会出場
社会貢献活動を積極的に行い、
プロジェクトの継続目標を果たすべく活動していく事

学びのテーマ

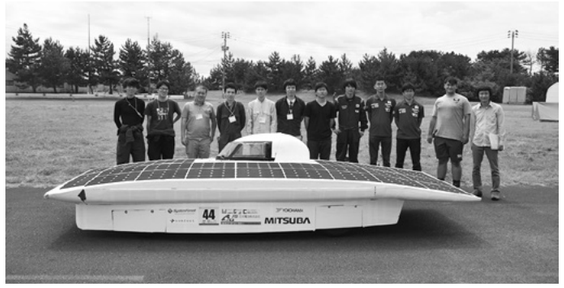
目標達成のため、PDCAサイクルを用いた工程管理や
チームマネジメント能力を学ぶ

リーダー	新山友宏	基盤工学部電気電子情報工学科	3年
サブリーダー	古川貴博	基盤工学部電気電子情報工学科	3年
サブリーダー	川上龍太郎	基盤工学部電気電子情報工学科	3年
広報リーダー	宍戸優太郎	基盤工学部電気電子情報工学科	2年
会計	小松颯	基盤工学部電気電子情報工学科	3年
コーディネーター	六嘉孝裕	九州教学課	
	高橋大優	九州教学課	
アドバイザー	清田英夫	基盤工学部電気電子情報工学科	
	高橋将徳	基盤工学部電気電子情報工学科	
	佐松崇史	基盤工学部電気電子情報工学科	

（参加人数31名）

❶ 活動概要

エネルギー資源枯渇や自然災害等、世界的な問題に対処することのできる次世代の学生を育成し、今後の世の中の発展の手助けをすることのできる能力を得るという理念を基に活動しているプロジェクト。
我々はプロジェクト内部で、ソーラーカー部門・ロボット部門に別れて活動しています。ソーラーカー部門はソーラーカーレース鈴鹿等での上位入賞を目指し、ロボット部門は災害時に救助を行うロボットの大会レスキューロボットコンテストでの本選出場を目指し、活動している。



❷ 一年間の達成目標と学びのテーマに対してどのような活動を行い、どのような学びがあったか

メカトロマイスタープロジェクトは「目標達成のためPDCAサイクルを用いた工程管理やチームマネジメント能力を学ぶ」というテーマのもと1年間活動してきた。そのなかで、「WORLD GREEN CHALLENGE クラス内優勝」、「レスキューロボットコンテスト（以下、レスコン）での全国大会出場」、「地域貢献活動への積極的な参加」の三つの具体的な目標を掲げている。これらの目標を達成するべく様々な活動を行ったが、今回はその中の3つを紹介する。

1つ目は、企業との連携開発についてである。ソーラーカーに搭載するシステムを地元のIT企業である株式会社システムフォレスト様とエネルギーマネジメントシステム（以下、EMS）を開発させていただいた。EMSの基本的な部分はすでにプロジェクト内で作成していたが、遠隔でモニタリングする部分の技術的な課題が解決できていなかった。そのような中、株式会社システムフォレスト様が機材および技術提供をしてくださり、EMSが無事に完成し大会で活用することができた。今年度、クラス２位、総合４位という良い結果を残せたことは、このEMSの導入に寄るところが大きいと考えている。ただ、あくまで目指す目標は「大会での総合優勝」であるので、マシンとEMSを更に進化させ、次年度の大会に臨んでいきたいと思う。

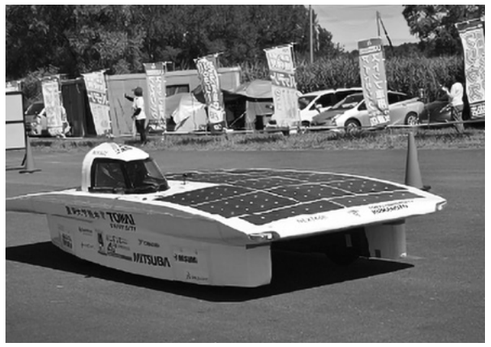
2つ目はレスコンチームの活動についてである。レスコンは今年で16回を数える歴史あるコンテストであり、多くのチームは古くから参戦している。チャレンジセンターでのチームとしては今年で４回目の参加となった。その意味で、他のチームよりも、経験も浅く、技術的にも相当の遅れがあった。ただ、ここ数年は、メンバーも増え、徐々に技術も向上し、また、学年間での知識と技術の継承もうまくできるようになってきた。本年度は、時間切れでダミアン（要救助者を模した人形）の救出までたどり着けなかったが、間違いなく、マシンの完成度は飛躍的に向上している。

3つ目は、地域貢献活動を増やしたことである。私達は、昨年度のプロジェクトで、「近年の化石エネルギーの枯渇、自然災害における被害の増加など、の問題に対処することのできる次世代の学生を育成し、今後の世の中の発展の手助けをすることのできる能力を得る」こと目標に掲げていたが、これまでは依頼されたイベントのみに終始し、目標を十分に達成することができていなかった。そこで、本年度は、実施するイベントの数を増やそうと、自らイベントを立案したり、地域のニーズの調査をした結果、小・中学生向けのイベントが昨年度より多く行うことができた。イベントを増やしたことで、ものづくりの面白さや、理系への興味を促すことができたのではないかと考えている。

このように我々は、地域、企業、チーム間の様々な繋がりがあってこそ、良い成果をいただいているので、協力していただいたプロジェクト内外の皆様に感謝の心を忘れずに、そして得たものを様々な方法でお返しできるようこれからも活動していく考えである。

❸ 年間スケジュール

月	企　画	概　要
6	第18回レスキューロボットコンテスト予選	神戸県神戸市で開催されたレスキューロボットコンテスト予選に出場した。新たな機構の取り入れや、新規にロボットを1台製作したが、結果は惜しくも予選敗退となった。
7	かもめ幼稚園へのロボット教室	熊本市にある東海大学付属かもめ幼稚園の園児106名に対して、社会貢献活動の一環としてロボットを使った出前授業「ロボットで遊ぼう」を開催した。
	TV番組への出演	「RKK熊本放送」の「ウェルカム！」という番組で「この夏日本一に！」というテーマでソーラーカーチームを取り上げていただいた。
	地元企業との連携活動	地元のIT企業である株式会社システムフォレスト様と協力し、同社のIoTプラットフォームを活用したEMSをソーラーカーに搭載するプロジェクトに取り組んだ。
8	世界一行きたい科学広場in熊本2018	東海大学熊本キャンパスで開催された世界一行きたい科学広場in熊本にて、「IchigoJamで遊ぼう」というテーマでブース出展した。
	WORLD GREEN CHALLENGE	秋田県大潟村にて開催されている「World GreenChallenge」に出場し、２５時間で９７５km走破し、アドベンチャークラス2位、総合4位、藤倉ゴム賞を受賞した。
10	学会発表	鹿児島大学で開催された日本産業教育学会にてプロジェクトで開発したシステムを、我々のプロジェクトの学生が、「IoTによるソーラーカーのエネルギーマネジメント」という題目で発表した。
11	レッツチャレンジマイコンカー	NPO法人HITOプロジェクト主催の小学生を対象としたマイコンカーの講習をメカトロマイスターの学生が教授のアシスタントとして参加した。
	こどもフェスタサイテク祭	熊本県多良木町にて開催されているサイテク祭りにて、子供向けのロボット操作体験や、レスキューロボットの展示を行った。
12	WORLD GREEN CHALLENGE クラス内優勝　レスキューロボットコンテストにおいて全国大会出場 社会貢献活動を積極的に行い、プロジェクトの継続目標を果たすべく活動していく事	グランメッセ熊本にて開催された熊本県内の1,2年生を対称とした職業や進路の選択について理解を深める催しに東海大学として同じチャレンジセンターの先端技術コミュニティACOTと参加し、我々の活動や、東海大学についてよりよく理解してもらった。
2	東海大学チャレンジカップ第７回マイコンカーラリー熊本大会	例年東海大学で開催されているマイコンカーラリーに選手・及び大会スタッフとして参加した。今年度は熊本県内の高校生１０７名が参加し、歴代最大規模の大会となった。



❹ 協力団体

アカイシアールディ株式会社、株式会社システムフォレスト、株式会社プラスコンフォート、横浜ゴム株式会社、有限会社野村商会、株式会社ミツバ、MISUMI学生ものづくり支援、ソリッドワークス・ジャパン株式会社、静岡ソーラーカークラブ、宮崎県立宮崎工業高校「Team宮工」

❺ メディア掲載・放映

7/25 RKK熊本「ウェルカム」（TV）

阿蘇援農コミュニティープロジェクト

熊　本

達成目標　農業関連技術の体得及び、農家さんとメンバー内の交流を通じて現場を知り、将来社会に貢献できる人作りを目指す

学びのテーマ　学生一人ひとりが考え行動し、農作業技術と知識を体得すること

リーダー	堀江美貴	農学部応用植物科学科	2年
サブリーダー	大村歩	農学部応用植物科学科	3年
サブリーダー	小野七海	農学部応用植物科学科	2年
広報リーダー	東内亮多朗	農学部応用植物科学科	3年
会計	大江瑛久	農学部応用植物科学科	3年
コーディネーター	高橋誠二	九州教学課	
アドバイザー	阿部淳	農学部応用植物科学科	

（参加人数123人）

❶ 活動概要

地震前まで農学部のキャンパスであった阿蘇地域を中心に人手不足に悩む農家さんの日常作業のお手伝いをしている団体。

「農家さんの作業負担軽減及び学生の農作業関連技術の体得」が第一の活動目的であるが、地震後は“農家さんに学生の笑顔と元気を届け続ける”ことも視野に入れ、活動をしている。熊本市内にキャンパスが移転している現在も往復2時間ほどかけて長期休暇や週末を使い、阿蘇地域や熊本県内各地の農家さんの元に伺っている。

❷ 一年間の達成目標と学びのテーマに対してどのような活動を行い、どのような学びがあったか

本プロジェクトの目標を達成するため、まずはじめに援農という活動意義の理解と共有に重点を置いた。入学式では10分間のプレゼン時間を設けてもらい、新入生全体に食と農林漁業の大学生アワードで農林水産大臣賞をいただいたときの発表を行うことができた。そこである程度興味を持った新入生が詳しい説明を聞きに来てくれた。特に個別説明会では一人一人のわからない点や聞きたいことに応対し、援農の意義について詳しく説明できた。そして意義を理解した上での活動を行うために下記のように活動を実施した。

（左から実施月、お手伝いした主要品目、お世話になった農家件数、参加メンバー数）

4月　アスパラガス・イチゴ・ブドウ 6件、28人参加
5月　イチゴ・トマト・ブドウ・サツマイモ 9件、49人参加
6月　イネ・トルコギキョウ・ブルーベリー 11件、39人参加
7月　アスパラガス・イチゴ・ハラペーニョ 7件、11人参加
8月　ブドウ 1件、5人参加
9月　イチゴ・サツマイモ 7件、18人参加
10月　イネ・ニンニク・イチゴ 3件、10人参加

今年度もこれまでどおり作業内容は播種、定植、収穫、葉かきや芽かきなどの管理作業、ビニールハウスの張り替えや建て替え、牛舎内清掃や除草作業を行った。どの活動でも農家さんから感謝のお言葉をいただいたが、特に人手の要する定植や力仕事のビニールハウスの補修、張り替えでは「作業を予定より早く終えられて本当によかった」や「みんなのおかげで今年も無事に張り替えることができた」などのうれしいお言葉をいただいた。メンバーからも「現場での知識をたくさん教えていただけてよかった」や「自分が活動に参加することで地域農業に貢献できている実感がわいた」などの声があがっている。前半の4月～6月までは毎週末、さらに同日複数農家に活動に行くことができたため、とてもいいペースで活動できていた。しかし後半の7月～10月は活動の告知が遅くなったこと、また活動頻度がまばらになったことにより極端に活動回数が減ってしまった。このように夏の農繁期（7月～9月）の活動回数が例年より少なかったため、今後は早めに農家さんと相談し、活動日を決める必要がある。そして本格的な冬場には一般的に農家は農閑期を迎え、さらには荒天で活動ができない日も増えた。その中でいかにして一定回数の援農活動を行うことができるか模索していく必要がある。具体的には自治体との連携を考えている。活動が主となる阿蘇地域の自治体・農家さんと予め活動日時、活動内容などを決めておき、学生と農家さんの両者にとって最適な内容とスケジュールで援農活動を実現できるようにすることが来年度以降の課題である。震災からもうすぐ3年。私たち農学部が阿蘇キャンパスを離れることになってから熊本キャンパスでの学生生活も慣れてきた頃である。永続的に活動を続けていくことが農家さんにとっても学生にとっても意義がある。活動を通してやりがいや現状がわかり、1人1人が考えて作業できるような援農を目指しつつ、これからも学生の笑顔と元気を農家さんへ届け続けていきたい。

❸ 年間スケジュール

月	企　画	概　要
4	本年度初回の援農活動	4/7・8の2日間、泊まり込みで南阿蘇村の5件の農家さんにメンバー8人が活動した。主にアスパラガスの管理やハウス補修を行った。頻繁にお世話になる農家さんだったのでこの時期の市場価格やアスパラガスの特性について深く教えてくださった。
5	常時援農活動	1ヶ月を通して9件の農家さんにお世話になり、のべ49人が参加した。サツマイモやブドウ、アスパラガスやニンニクなど多岐にわたり管理作業のお手伝いをした。夏前の大切な時期に援農活動を行えたことにとても意味があったと思う。
6	産山村役場にて打ち合わせ	夏の長期援農にむけて、役場の方と日程や農家さん件数、お手伝いする作物について打ち合わせをした。
7	夏の援農活動	1ヶ月を通して7件の農家さんにお世話になり、のべ11人が参加した。
8	夏の援農活動	1ヶ月を通して1件の農家さんにお世話になり、のべ5人が参加した。
9	夏の援農活動	1ヶ月を通して7件の農家さんにお世話になり、のべ18人が参加した。
	夏の援農活動の報告及び反省	報告・反省を兼ねてBBQをした。メンバーのうち40人が参加し、コーディネーターの先生やメンバー同士との意見交換の場にもなった。また秋に向けてもう一度援農の意義を確認した。
10	常時援農活動	1ヶ月を通して3件の農家さんにお世話になり、のべ10人が参加をした。
	湘南キャンパスでの中間報告会に参加	普段は交流できない湘南キャンパスなどのプロジェクトの皆さんと交流することができ、貴重な意見交換の場所ともなった。援農活動について興味をもってくださり、熱心に質問をしてくださる方も多く自分たちの活動意義について再認識することもできた。
11	建学祭にて展示発表	地域の方を中心に、来場された方一人一人に援農活動について説明をした。小さな子供もたくさん来場され、わかりやすく簡潔に説明することを心がけた。

❹ 協力団体

産山村弁財天営農集落組合、南阿蘇村（農政課）

❺ メディア掲載・放映

4/19 読売新聞夕刊（新聞）、5/19 読売新聞熊本版（新聞）、5/22 平成29年度食料・農業・農村白書（第196回国会提出）、6/1 九州農政局「トップランナーの取り組み」（WEB）、6/16、KAB「くまパワプラス」（TV）、掲載号9月 進研ゼミ高2講座「My Vision」（情報誌）、9/13 KKT、RKK、TKU「産山村での長期援農活動」（TV）

阿蘇は箱舟プロジェクト

熊　本

達成目標　阿蘇地域での除草活動や不法採集防止のためのパトロール活動、並びにHPのデータベースの更新を例年通り行うとともに、阿蘇地域での復興の支援を本格的に行うこと

学びのテーマ　活動を通じて阿蘇地域における生物多様性の保全の重要性を学ぶ

リーダー	古賀存	農学研究科農学専攻	1年
サブリーダー	石向楓	農学部応用植物科学科	4年
広報リーダー	本田将大	農学研究科農学専攻	1年
会計	川上莉奈	農学部応用植物科学科	4年
コーディネーター	金子博	阿蘇実習センター	
	千々石有紀	九州教学課	
アドバイザー	村田浩平	農学部応用植物科学科	
	岡田工	現代教養センター	

（参加人数119名）

❶ 活動概要

阿蘇の草原は野焼きや放牧など、阿蘇に暮らす人々の生活の営みによって維持されてきた。しかしながら、阿蘇に暮らす人々の高齢化が進み、放牧農家も減少するなど、草原の環境は悪化し続けている。この生態系を維持し後世へ残すために放牧をしなくなった牧野の除草行い、草原の維持に努めるとともに、阿蘇に生息する希少生物の保護を行っている。また、これらの活動を通じて体験したことや観察できた生物を多くの人に伝えている。

❷ 一年間の達成目標と学びのテーマに対してどのような活動を行い、どのような学びがあったか

今年度、私達は活動を通じて阿蘇地域における生物多様性の保全の重要性を学ぶことを目的に活動してきた。これまでの活動で、阿蘇に暮らす人々の生活も阿蘇の自然環境の維持につながっていると感じ、今年度は新たに阿蘇の放牧農家さんのお手伝いを行った。この活動で、阿蘇の自然についてだけではなく、人手不足や高齢化などの放牧農家の現状や阿蘇地域が抱えている問題が見えた。このことで本プロジェクトが阿蘇のためにできることはもっとないだろうかと考えるきっかけとなった。

希少野生動植物の保全、不法採集防止のためのパトロール活動は例年通り行った。パトロールを通じて、阿蘇に生息するオオルリシジミなどの希少野生動植物をプロジェクトメンバーに見てもらうことで、阿蘇の希少野生動植物に関する知識が得られたと思う。本プロジェクトは発足時は阿蘇キャンパスで活動していたものの熊本地震の影響により現在は熊本キャンパスで活動を行っている。そのため、発足当初は身近であった阿蘇の自然が今では非日常的なものとなっている。パトロール活動を通じて、阿蘇キャンパスでの生活を体験した上級生が新入生に話すことで、少しでも阿蘇を身近に感じてもらうことが出来たと思う。また、今年度は湘南キャンパスとの交流を積極的に行い、5名の湘南キャンパスの学生がパトロールに参加した。湘南キャンパスのプロジェクトメンバーは、この経験をもとに、阿蘇の自然を伝える活動を行っている。

現在、阿蘇の放牧農家の減少により、草原が荒れてきている。そのため本プロジェクトでは例年3回、阿蘇地域で大規模な除草活動を行っている。その内1回は水源の森林ボランティアネットワークの方々と協力して行った。除草活動には、多くのプロジェクトメンバーが参加し、なぜ除草活動を行うのかを事前に知っておくことで目的意識が高まり、協力して迅速に活動を行うことが出来きた。除草活動を通じて、草原の環境を維持していることを実感した他、コミュニケーション能力やチームワークを養うことが出来たと感じた。

建学祭の展示はプロジェクトメンバーが協力し、3日間の展示を成し遂げることが出来た。事前の準備では、役割ごとにリーダーを決め、計画通りに作業が進むよう工夫した。プロジェクトメンバー個々が積極的に活動することで、無事計画通りに作業を終えることが出来た。

❸ 年間スケジュール

月	企　画	概　要
4	牧柵修理	阿蘇の草原は、放牧農家によって維持されており、放牧農家を支援することは阿蘇の生物保全に繋がります。そのため、被災した放牧農家の牧柵修理や放牧道路の管理、野焼き補助など牧野管理を行った。
5	不法採集防止パトロール	希少動植物の生息状況について現地勉強会を開催すると共に、地元警察とも協力して、不法採集防止のためのパトロール活動を実施。不法採集者が多い4～7月の全土日祝日に加え平日は不定期に巡回を実施しています。
6	オオルリシジミ生息地の環境維持を目的とした除草活動	阿蘇地域の複数の生息地において、生息環境の維持と環境復元のため年3回～5回の除草活動を実施すると共に、専門家の協力を得て個体数の推移をモニタリングすることで、その効果の判定技術の確立に努めました。
7	昆虫教室in松橋小学校	草原の希少な動植物の保全の意義や本活動を広く知っていただくために、小学校で昆虫教室を開催し、昆虫クイズや標本作成などを通じて情報を発信し、幅広い層の方々に阿蘇の魅力と本活動の重要性について伝えました。

❹ 協力団体

水源の森林ボランティアネットワーク

❺ メディア掲載・放映

6/10 KKT「ストレートニュース」

あにまるれすきゅープロジェクト

熊　本

達成目標　本プロジェクトは本題である捨てられる動物を増やさないために多くの人伝えることが目標である

学びのテーマ　動物愛護の現状を改善するため、人と動物の生命について多くの人に知ってもらう

リーダー	新田裕之	農学部応用植物科学科	3年
サブリーダー	兵頭慎一朗	農学部応用動物学科	3年
サブリーダー	飯田彩華	農学部応用動物学科	3年
広報リーダー	佐々木海歩	農学部応用動物学科	3年
会計	入江栞	農学部応用動物学科	3年
コーディネーター	佐藤良彦	九州事務課	
	伊藤貴人	九州事務課	
	神廣孝至	農学教育実習センター	
アドバイザー	森友靖生	農学部 応用動物科学科	

（参加人数62名）

❶ 活動概要

本プロジェクトは、ポスター発表やSNSを利用しての啓発活動を中心に、譲渡会の手伝い、動物愛護センターや動物愛護団体の犬猫のお世話、地域のイベントでストラップなどを販売して売上金を寄付したり、また大学でタオルなどの物質を集めて寄付したり、子どもたちに動物を好きになってもらう授業などを行っている。間接的に保健所の犬猫の殺処分数ゼロにするという目標を達成するために活動している。

❷ 一年間の達成目標と学びのテーマに対してどのような活動を行い、どのような学びがあったか

今年度の達成目標は、「犬猫の殺処分をなくすために、多くの人に伝えること」であった。この目標達成のために、まずメンバーを多く集めることにした。メンバーが多くなれば、その分活動以外で伝えられる人が多くなると考えたからである。本プロジェクトは、ここで適材適所を学んだ。絵が上手なメンバーや、ビラ配りが上手なメンバーもいる。この適材適所がうまくいったため、今年度はいつもの倍以上の新入生が集まったと思われる。また、新入生が入ってすぐに、アイスブレイクを行ったことも効果があった。学部学科を越えて仲良くしているのを見て、いつから仲良くなったのか訊いたところ、本プロジェクトのアイスブレイクからということが分かった。これは、メンバーの定着率と活動回数に影響するのではないかと思慮されるが、定着率をあげるためにも定期的に行うことが今後の課題でもある。

次に小学校や保育園などでの啓発活動として、動物の命についての授業や低年齢層には動物を好きになってもらうためのクイズなども行った。この活動を広く知ってもらうため、近隣の小学校や保育園などへの提案も行ったが、幅広い年代に対応することの難しさや、企画書の不備、事前の応対確認など準備不足の点が多くみられ、準備の重要性を学んだ。

さらに、動物愛護祭りや中間報告会などで行った啓発活動などで、多くの人との交流の中で、動物愛護に関する関心が高まってきているということを感じた。

しかし、その陰で多頭飼育崩壊や動物虐待などの問題が全国的に問題になっている。一時の感情だけでボランティアをしようとすると無理が生じることがあり、この無理により、結果として、飼い主の生活破綻にも繋がってしまう多頭飼育崩壊などの問題についても学んだ。これは、どのボランティア活動にも当てはまると思う。2018年に、「スーパーボランティア」という言葉が流行したが、ボランティアをするにもしっかりとした準備、計画のうえボランティアを行うのは良いと思う。今後はボランティアの行い方についても考えていく必要があると考える。

また、小物販売の時など、現場主義に徹することで、メンバーが活動する意欲を上げ、効率よく活動できることを学んだ。幹部ほどに活動の最前線にいるべきだと感じた。なお、今年度の熊本市における犬や猫の殺処分数がゼロになったニュースも届き、我々の活動も少なからず寄与していると感じている。

最後に、今年度は活動に協力していただいた団体や個人の方々から多くのメッセージをいただいた。これは、メンバーが現場で一生懸命頑張ったことだけでなく、先輩方が今まで繋いでくれたからだと考え、続けていくということの重要さを学んだ。

❸ 年間スケジュール

月	企　画	概　要
5	阿蘇くまもと シェルターの手伝い	熊本地震の被災動物の保護を行っている動物愛護団体の手伝い。活動内容は、主にシェルターにいる犬の散歩やゲージの掃除などである。今年度はドックランの制作ができなかったので、来年度に持ち越しとなった。
	黒髪シェルターの手伝い	熊本地震の被災動物の保護を行っている動物愛護団体の手伝い。活動内容は、主に猫のケージの掃除と猫と遊ぶことである。かなり返還が進んでいるということで、この活動は終わりに近いと思慮される。
6	熊本県庁の譲渡会	熊本県庁で行われた大規模な譲渡会の手伝いに行った。活動内容は、会場設営、会場案内、受付、ポスター展示である。イベントのことを知らない方も多かったので、もっと広報活動を行っていく必要があると感じた。
	熊本県動物愛護 センターの譲渡会	動物愛護団体フィリアさんが行っている、熊本県動物愛護センターの犬猫の譲渡会の手伝いを行った。活動内容は、犬の散歩と受付である。毎回５、６名のメンバーで活動している。
7	さくらんぼ保育園訪問	幼児を中心に啓発活動を行った。内容は、迷子札について紙芝居と動物についてのクイズである。園長先生の要望で、カエルの飼い方を教えてほしいとのことだったので、飼育ケースを見せて教えた。

❹ 協力団体

熊本市動物愛護推進協議会、熊本県動物愛護推進協議会、熊本県、熊本県動物愛護センター、熊本市動物愛護センター、動物愛護団体フィリア、阿蘇くまもとシェルター、熊本県災害時動物救援チーム、阿蘇保健所、動物愛護団体きずなの丘、長尾孝之、熊本市立画図小学校、さくらんぼ保育園、阿蘇復興への道プロジェクト、萩三津雄、くるみの森幼稚園

❺ メディア掲載・放映

7/3 熊本日日新聞（新聞）

札幌ボランティアプロジェクト

札　幌

達成目標　除雪本番時期までにメンバーのモチベーションを保つ施策を行い、主体的なメンバーを確保しつつ、昨年度の除雪依頼件数の約2倍となる60件以上の除雪を行う

学びのテーマ　地域を知り、地域を活かす方法を学ぶ

リーダー	和田涼平	生物学部海洋生物科学科	2年
サブリーダー	下遠野佑哉	生物学部生物学科	2年
サブリーダー	近藤雅喜	国際文化学部国際コミュニケーション学科	2年
広報リーダー	滝田陸人	国際文化学部国際コミュニケーション学科	2年
会計	東原由佳	生物学部生物学科	2年
コーディネーター	松島佑介	札幌教学課	
	番場浩	札幌教学課	
アドバイザー	植田俊	国際文化学部地域創造学科	
	田川正毅	国際文化学部デザイン文化学科	

（参加者数31名）

❶ 活動概要

本プロジェクトは、冬期の高齢者世帯を対象とした除雪をメインの活動とするプロジェクトである。雪のない春期～秋期は大学周辺の町内会や児童館の行事の手伝いを行うボランティア活動及び冬期の除雪ボランティアに向けた依頼世帯の募集・誓約書を記入していただくための世帯訪問を行っている。また、平成29年度からは7月に札幌キャンパスで行われるラベンダー祭りの主催も開始した。

❷ 一年間の達成目標と学びのテーマに対してどのような活動を行い、どのような学びがあったか

2018年度の達成目標は「除雪本番時期までにメンバーのモチベーションを保つ施策を行い、主体的なメンバーを確保しつつ、昨年度の除雪依頼件数の2倍となる60件以上の除雪を行う。」と設定した。この目標に対し、役員の2年生は主に1年生のモチベーションを保てるように、様々な角度から施策を行った。ここでいうモチベーションとは除雪のみに対するモチベーションではなく、ボランティア活動全体におけるモチベーションを向上させるという意識のもと取り組んだ。具体的には、除雪以外のボランティア活動を行う際、企画ミーティングの段階での1年生の参加、あるいは1年生のみでの企画グループを構成し、「計画」「実行」「評価」「改善」の企画作成における基礎的サイクルを実際に経験できるような取り組みを行った。また除雪シーズンでは、依頼者へ確認の電話をする際、実際に上級生と一緒に世帯訪問先で除雪ボランティアの手続きをするなどといった、学生と地域社会との関わり方を見たり経験してもらうような場も数多く設けた。これらは1年生が今後のプロジェクト活動に参加するにあたり、ボランティア活動を実際に行うためにはどういった過程や手続きなどが必要であるのかを実際に身をもって体験してもらい、それらを通して得たものをどう活かしていくのかを主体的に考えてもらうことが狙いである。このような様々なモチベーション維持における施策を講じた結果、2018年度に実施した各プロジェクトでの1年生の参加率は１００％であり、どの活動でも必ずほとんどの1年生が参加していた。次年度も引き続き行っていきたい。また、1年生を含め既存のメンバーに対しては、外部からの講師による「認知症セミナー」という講演会に出席する場を設けた。そこでは、認知症とはどういった症状なのかを再認識すると同時に、認知症の高齢者やその周囲の人たちが抱える問題や現状、または認知症の方との接し方など、認知症に関わる多くのことを深く考える機会を得ることができた。実際に除雪依頼者の中には認知症の方も含まれているが、このセミナーで得られた知識を活かし、円滑に除雪手続きを行うことができた。次に、除雪件数についてだが、結果的には達成することができなかった。原因としては札幌市の降雪量が少ないことや、除雪期間が学生たちの定期試験と重なってしまうなどの理由により、飛躍的に除雪回数を増やすことができなかったことが挙げられる。しかし、２０１８年度に依頼された除雪オーダーには全て応じることができたことは大きな成果であるといえる。今年度の除雪活動を通して感じたことは、目標に設定することは件数といった数字ではなく、いかに除雪を必要としている人たちの要望に応えることができるのかが重要だと実感した。

❸ 年間スケジュール

月	企　画	概　要
6	建学祭広報活動	建学祭では露店や構内展示と共に本プロジェクトのPRを行った。また新入生が関わる初の大きな行事であるため、建学祭を通してプロジェクト内の親交を深めることで今後の活動に向けて好調なスタートをきった。
7	ラベンダー祭り	札幌キャンパス内のラベンダー畑にて行われる『ラベンダー祭り』の主催を当プロジェクトが行った。吹奏楽、ダンス、よさこいのパフォーマンスに加え、札幌軟石の体験コーナーなど毎年大変好評であった。
8	藻岩夏祭り	札幌キャンパスのある“藻岩地区”町内会連合会主催のお祭りをお手伝いさせていただいた。運営の手伝いの合間には地域の方と共に食事をしたり、花火を見るなど私たちも“地域の一員”となった気分で楽しんだ。
9	札幌青少年女性活動協会主催『あそびの宝箱』	札幌市南区の児童会館合同イベント『あそびの宝箱』にて準備・片付け・「軟石や」様（体験コーナー）の手伝いなどを行い、多くの子供たちと交流した。
11	除雪準備	12月から開始する除雪活動に向けて準備を行う。夏から除雪への申し込みを開始し、お申込みのあった世帯には誓約書などを記入していただくために1件1件訪問し、除雪の条件などを改めて説明する。
12・1・2	除雪活動	当プロジェクトのメイン活動である。高齢者世帯を対象とし、12～2月の間、主に放課後に除雪を行う。前身の福祉除雪プロジェクトから10年以上に亘って続く活動で、地域の皆様からも温かい声援を多数いただいている。

❹ 協力団体

旭台町内会、軟石や、公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会、藻岩地区町内会連合会、札幌市南区土木センター

❺ メディア掲載・放映

11/30 HBC「北海道放送ニュース」（TV）、2/5 HBC「今日ドキ！」（TV）、1/17 みなみ区冬みち便り（情報誌）

ユニークプロジェクト／ものつくり館

ユニークプロジェクト活動報告

校舎	プロジェクト名称	
湘南	きらきら実験教室	子どもたちや地域の方々を対象に、ものつくりの楽しさと理科に対する興味・関心を引き出すために企画し実施する。
	アーカイブ・レリック(旧 Egyptian Project)	Egyptian Projectの活動を引き継ぎつつ、エジプトのみならず、広く古い時代の大学のコレクションを整理し、教育普及や生涯学習支援活動へ活用する企画を実施する。
	ポリヘドロン工作隊	多面体工作を通して、多くの人に科学への好奇心をもってもらえるようなイベント活動を実施する。
	東海魅力宅配便	大学生活や海外研修航海での経験や学びを他学生へと発信・共有していくことで東海大学の魅力をより多くの学生に知ってもらう。
	Sun flower	カンボジアの子どもたちと交流し、カンボジアに学校を建設するための活動を実施するとともに世界の教育の現状を地域の人々に伝える。
	Connect	秦野市内の子どもや若者が社会参加を通じて、「人と人、人と社会とのつながり、自分らしく生きていく」ことを支援する。
	★Free paper(Shells)	フリーペーパーを通して、世間からあまり注目されていない社会問題を取り上げて、社会的少数者の声を世間に発信する。
	★From Scratch	航空機製造メーカーAIRBUS社が主催する世界的航空技術アイデアコンテストへの参加及びアイデアを世界へ発信する。
代々木	よょさんぽ	地域における“多世代交流”のつなぎ役となるよう、地域における学生や地域住民の参加型イベントを企画・実施する。
高輪	ロボP	技術力向上を目指しつつ、ものつくりを通して地域の発展に貢献する。
	★NSテクノロジーズ	あらゆるものがインターネットにつながる時代において、社会貢献イベントや大会を通じて、社会に出ても活用できるハードウェアとソフトウェアの両方の技術を身につける。
	★ビジネス創造プロジェクト	ビジネス研修会の運営、ゼロ飯プロジェクトの実施、神奈川産学チャレンジプログラムへの参加を通して、4つの力を身につける。
伊勢原	★Challenge for the Borderless World	市民と一緒に、地域を健康にするための手法を、医療大学生の視点から検討し、地域住民と共有する。

校舎	プロジェクト名称	
清水	ワンダフル・マリンアニマルズ	廃棄物などを用いて海洋生物のメカトロニクスを製作し、全国各地のイベントで実演を行い、社会問題となっている海洋環境の課題や海洋生物の生態等に興味をもってもらう。
	三保活性化プロジェクト	三保半島を中心とした地域の人々と積極的に交流し、地域活性化に貢献する。
	商品開発プロジェクト	静岡県の特産である鮮魚や農畜産物を利活用し、食品開発を進め、地域活性化につなげる。
	★Shark Amazing Project	地域密着型(清水・三保)のイベントを通して、さめの友好的な活用方法を地域の人々に知ってもらう。
熊本	阿蘇復興への道	南阿蘇地域の復興支援に係わり、震災当初から今日までの現状を全国に「語り部」として繋げている。またイベント活動に参加し、地域活性化を促す。
	Action Marketing プロジェクト	熊本県内のアクティビティや食文化を通して地域の方と交流し、活性化を図る。
	動植物園プロジェクト	熊本市動植物園の保護が必要な希少動物をリストアップし、環境保全・動物保全を目的とした展示会や講演会を実施する。
	★熊本地域プロデュースプロジェクト	水越地区、球磨村など熊本県各地域で深刻化している過疎化問題に対して、観光マネジメントを活かし、地域住民と協力して着地型観光を実践する。
	★阿蘇環境プロジェクト	阿蘇地域について生態系と水循環の両面から環境調査を行い、阿蘇地域の雄大な自然を広く発信することで阿蘇地域の復興を支援する。
札幌	地域連携プロジェクト	札幌南区の地域住民と連携し、南区の魅力創造と社会的課題の解決に挑戦する。
	札幌ビオトープをつくろう会	グラウンドへの融雪水の流出阻止、エゾサンショウウオの産卵・孵化促進のため敷地内のビオトープを活用する。
	★しきおりプロジェクト	札幌キャンパス光風園の魅力を調査し、HP等で情報発信することで、近隣の住民に身近な自然を知ってもらう。

★…新規プロジェクト

ものつくり館訪問団体

日付	団体名	人数	担当
4月 17日	日本テレビクルー	3名	事務課
4月 20日	東海大学付属望星高等学校生徒	46名	一貫教育課
5月 19日	日本テレビクルー	3名	事務課
5月 30日	日々輝高等学校1年生	10名	入試広報課
6月　6日	インドネシア・スラバヤ大学学長	7名	グローバル推進室
7月　4日	ローレンス市親善中学校生徒	30名	地域連携課
7月 14日	相洋高等学校2年生	17名	入試広報課
7月 24日	コロンビア、ラオス、中国高校生	30名	国際教育センター
8月 27日	海外大学の先生方	6名	グローバル推進室
8月 28日	近畿大学職員	1名	国際教育センター
8月 30日	カンボジア医者団体	8名	国際教育センター
10月 23日	リトアニア視察団	10名	地域連携課
11月　9日	日立金属社員	2名	チャレンジセンター
12月　7日	日立金属社員	2名	チャレンジセンター
12月 21日	UAE大学生	10名	グローバル推進室
2019			
1月 22日	韓国高校生	20名	国際教育センター
1月 25日	台湾大学生	30名	グローバル推進室
2月 20日	台湾大学生	7名	地域連携課

チャレンジセンターの活動

「第20回チャレンジセンターセミナー」を開催

場所:湘南校舎8号館
日付:7月20日

「人と地域とのつながり」をテーマに礒波清一教授(東海大学現代教養センター)が講演。全国のキャンパスをテレビ会議システムでつなぎ、地域住民や学生、教職員ら約200名が聴講した。礒波教授は、はじめに自身の経歴を語り、ホテル業界や不動産業界で働いた経験や、国内外のリゾート地の成り立ちについて紹介しました。また、自身が起業した株式会社EWELのビジネスモデルや事業内容、クライアントの傾向などについて説明したほか、リゾート開発に携わった北海道ニセコ町における経済波及効果について解説。外国人観光客が増加しているニセコ町の成功要因について、「地元の住民ではない人がその地域にほれ込んでリゾート開発を後押しし、それを住民が受け入れて支援したことが重要。人と地域を理解し、信頼関係を築くことが何より大切です」と語りました。学生からは、地域住民とのかかわり方や地域創生に必要なポイント、起業の際の注意点など多岐にわたる質問が挙がり、礒波教授が一つひとつ丁寧に答えました。

「2018年度チャレンジプロジェクト中間報告会」を開催

場所:湘南校舎14号館
日付:10月20日

湘南キャンパスで同日に開催した「TOKAIグローカルフェスタ2018」の一環として実施。当日は全国のキャンパスで活動する20のチャレンジプロジェクトの代表者が成果を報告した。各プロジェクトに所属する学生たちがそれぞれブースを設営し、訪れた学生や地域住民に向けて活動目標やこれまでの実績を紹介しました。「サイエンスコミュニケーター」では長さの異なる金属パイプを地面に落下させて音楽を奏でる「バンジーチャイム」を披露する科学実験ショーも開催。また、2号館前では「ライトパワープロジェクト」がソーラーカーと人力飛行機を、「Tokai Formula Club」がフォーミュラカーを展示。ソーラーカーのデモ走行も行い、多くの親子連れでにぎわいました。

「2018年度チャレンジセンター最終報告会」を開催

場所湘南校舎8号館
日付:2019年2月4日

全国のキャンパスで活動する20プロジェクトの代表者が、地域の方々や学生、教職員を対象に、全国各地で展開したものつくり、国際交流、社会貢献、環境、動植物保護、地域活性などさまざまな分野の活動から得た成果や学びについて報告を行いました。当日は全国のキャンパスをテレビ会議システムでつなぎ、全体で約600名が来場。大学運営本部の内田晴久本部長が挨拶した後、各プロジェクトを代表する発表者が登壇し、それぞれの活動について写真やテキスト、図表を用いて発表。プレゼンテーションの終了後、内田本部長のほか、審査員を務めた本学連合後援会の二重作昌明会長、本学同窓会東京ブロックの宮原孝夫会長、株式会社アビストの柳澤宏美氏、株式会社和光ケミカルの小寺義昭氏、本学現代教養センターの成川忠之所長、本センターの岡田工センター長が、各プロジェクトの発表や活動内容を審査し、特に高い評価を得たプロジェクトに贈られる「グッドプレゼンテーション賞」には、「ライトパワープロジェクト」「東海大学学生ロケットプロジェクト」「キャンパスストリートプロジェクト」「スポーツ社会貢献プロジェクト」の4団体が選ばれ、岡田センター長より代表者に賞状が授与されました。

「第21回チャレンジセンターセミナー」を開催

場所:湘南校舎8号館
日付:2019年2月5日

「課外活動を通じてどんな力が身につくのか～チャレンジプロジェクトのPROG結果から～」をテーマに、株式会社リアセック酒井陽年氏が講演し、湘南校舎で活動しているプロジェクト学生約100名が聴講しました。本学では、河合塾と株式会社リアセックが共同開発したテスト「PROG」をもとに、大卒者として社会に求められる汎用的な能力・態度・志向性を測定する「『4つの力』のアセスメント」を開発しています。施行期間となる今年度は、1年次生全員と3年次生の希望者が「PROG」を受験し、その結果からプロジェクト活動によって伸びた能力や大学生活でこれから経験したほうがいいことなどをご講演いただきました。また、酒井氏は社会で最も求められるのは「課題解決力」であると解説したほか、他大学の「PROG」結果と比較してプロジェクト学生の「協働力」「課題発見力」などさまざまな能力の数値が高いことを紹介。「プロジェクト活動での経験や身につけた能力を、社会に出たときにいかに再現できるかが重要です。また、PROGで測定する能力がすべて高い人はいません。だからこそ、どの企業でも基本的に仕事はチームで行っています。試験結果に一喜一憂するのではなく、自分の得意分野を伸ばし、周りと支え合うことを意識してみてください」と語りました。

2018年度チャレンジセンター長賞候補者一覧

No.	校舎	プロジェクト名	氏　名	リーダー年度
1	湘南	病院ボランティアプロジェクト	佐藤主樹	2016年度
2		スポーツ社会貢献プロジェクト	中嶋亮太	2017年度
3		サイエンスコミュニケーター	小川沙麗	2017年度
4		キャンパスストリートプロジェクト	関口雄哉	2017年度
5		Tokai Formula Club	麻亮太	2017年度
6		ライトパワープロジェクト	佐藤喜昭	2017年度
7		東海大学学生ロケットプロジェクト	根子隆誠	2018年度
8		Tokai International Communication Club	永田聖	2016年度
9		3.11生活復興支援プロジェクト	武田宗一郎	2016年度
10		DAN DAN DANCE&SPORTS プロジェクト	門田菜々	2016年度
11	高輪	Takanawa共育プロジェクト	崎山奨	2017年度
12	熊本	先端技術コミュニティACOT	宮崎晃弥	2017年度
13		メカトロマイスタープロジェクト	堀青蓮	2017年度
14		熊本地域プロデュースプロジェクト	高橋一央	2017年度
15		阿蘇援農コミュニティープロジェクト	藤川志津香	2017年度
16		阿蘇は箱舟プロジェクト	井手脩人	2017年度
17	札幌	札幌ボランティアプロジェクト	藤盛将仁	2017年度

＊認定条件
1.チャレンジプロジェクトに加入して2年以上活動した者(継続していなくてもかまわない)
2.プロジェクトリーダーを務めた経験がある者
3.修了認定を2回以上受けている者
4.卒業が決定している者

東海大学チャレンジセンター
〒259-1292 神奈川県平塚市北金目 4-1-1
TEL：0463-50-2504（直）
FAX：0463-50-2472
MAIL：challenge@tsc.u-tokai.ac.jp
URL：http://www.u-tokai.ac.jp/challenge/